

解題

梧窓詩話

二卷

蓀坡 林瑜著

林瑜、字は孚尹、蓀坡、又は蘭坡と號す、通稱は周輔加賀藩の儒官となり、大に藩内士民文學の氣風を鼓吹せり、其の少きや、曾て江戸に遊び昌平學に學びたりといふ、天保七年七月歿す、年五十六。

此書は、泛く唐宋元明清の詩を論じ、特に宋詩を學ぶもの、多くは溫雅麗密を好まずして、奇字僻典を用ふるを好むは、下劣の詩魔なりとし、以て僞宋詩を排撃せり、其の他詩語を擧げ攷證する所、皆精緻を極む、大窪詩佛の序に、學問之博、考證之精、云々といひ、以て此れを稱揚したるは、蓋過褒に非るなり。

梧窓詩話叙

多作多改多讀多講之外，別無學詩之法。林君蓀坡，加賀儒官也。其在江戶，經業之暇，數以詩來示，字羅珠玉，音協宮商，或一二摘之疵瑕，則欣然而退，必改而後又來。其多作多改，余嘗已見之矣。及其歸國也，寄所著梧窓詩話二卷，索予題言。予披而閱之，悉皆舉古人之詩論之，學問之博，考證之精，予於是乎又知其多讀多講積日之功矣。比之世之采今人之詩爲詩集，論今之人詩爲詩話，以銜名射利者，豈可同日而論哉！古人有言，讀書非爲詩也，而學詩不可不讀書。予於此編亦云，壬申夏日。

詩佛老人 大 窪 行 題

梅屋松井元輔書

梧窓詩話目次 舊本無目次
今補之

卷一

古人苦吟	一	傳生 傳坐	七	猜拳	一四	無窮有 _二 兩義 _一	四
暗合	二	梅月	八	團蒲	一五	掃晴娘	五
心聲	三	撒 _レ 豆驅 _レ 鬼	八	淮南 小宰羊		居士	五
學 _二 宋詩 _一	三	一通	八	雪花棗	一五	繪馬	五
脫換之妙	三	倒載	九	生書	一七	方空 輕容	六
橫陳	三	案酒	一〇	麻沙 麻沙板	一七	陶九成約語	六
綠拗兒	四	明字	一〇	鑿鑿	一七	握 _レ 月擔 _レ 風	七
錦步障 錦洞天	五	近人好用 _二 奇字 _一	二	惜 _レ 花人 別 _レ 花人 _二 九 _一	九	詩本 畫本	七
顧藉 數藉	五	論 _レ 詩如 _レ 品 _二 花木 _一	三	卷二		村字	九
無 _二 藉在 _一	五	董玄宰論 _レ 書	三	一川	一	紅字	九
熟字拆用	七	陸楊同押 _二 尖字 _一	三	捉迷藏	二	水精霞 素雨	九
世講	七	軟脚酒 軟脚局	三	行由 來由	三	雪佛碑詩	一〇
		初七 上九	三	土產 歸遺	四	咏物最難	一〇

梧窓詩話目次

一

桃笙	二	百柄琴	百柄本	百	摹 _二 倣唐詩 _一	二六
含風齋	二	納碑		二〇	妙在 _二 自然 _一	二六
涼傘樹	三	臨碑		二〇	西山公詩	二七
風花	三	破字		二〇	感觸有 _二 由來 _一	二六
買笑錢	三	取次		二二		
買笑花	三	趁 _レ 虛		二二		
萩花	三	耳視	目食	眼語		
天竺花	三	目笑		三三		
斷腸	三	寄 _二 邊衣 _一 詩		三三		
海棠	三	花箭		三四		
婪尾春	四	一字不 _レ 工全作裏				
飲茶詩	四	工		三四		
中酒	五	本邦人佳句		三六		
中興	五	作 _レ 詩用 _レ 思		三六		
誤馬	七					
端陽	七					
重午	七					
人事	八					
意氣	八					
家林	九					
		目次終				

梧窓詩話卷一

蓀坡 林瑜孚尹著

賈浪仙詩云、兩句三年得、一吟雙淚流、知音若不賞、歸臥故山秋、又金門歲節載、賈島以歲除、取一年所得詩、以酒醉之、可見古人用心如此、又能自矜重、老杜爲人性癖耽佳句、語不驚人死不休、孟東野夜吟曉不休、苦吟鬼神愁、盧延遜險覓天應悶、狂搜海亦枯、又如僧貫休得句先是佛、亦浪仙之類也、蓋詩能爲苦吟、則何語不妙、今人作詩、多以敏捷爲能事、倉卒苟且之間、連篇累章、而讀之淺薄無味、唯使人頭岑岑而白日思睡、更無足

賈浪仙が詩に云ふ、兩句三年に得、一吟雙淚流る、知音若し賞せずんば、歸り臥せん故山の秋と、又、金門歲節に載す、賈島、歲除を以て一年に得る所の詩を取り、酒を以て之を醉すと、見る可し古人の心を用ふる此の如し、又能く自ら矜重す、老杜が、人と爲り性癖にして佳句に耽る、語、人を驚かさずんば死すとも休まず、孟東野が、夜吟曉まで休まず、苦吟鬼神愁ふ、盧延遜が、險覓大應に悶ふべし、狂搜海亦枯る、又僧貫休が、句を得て先づ佛に呈すが如き、亦浪仙の類なり、蓋、詩能く苦吟を爲せば、則何の語か妙ならざらん、今人の詩を作る、多くは敏捷を以て能事と爲す、倉卒苟且の間、連篇累章、而して之を讀むに淺薄にして味無し、唯人頭をして岑岑として白日に睡を思はしむ、更に道ふに足る者無し、是れ心を用ひざるの故を以てなり、古人言ふ有り、疾行に善迹無しと、實に然

「道者、是以不用心之故也、古人有言、疾行無善迹矣、實然。」

權德輿詩、巫山雲雨洛川神、珠攀香腰穩稱身、惆悵粧成君不見、含情起立問傍人、結意極說婦女之情狀、象想逼真、而又多與之相類者、朱慶餘詩、洞房昨夜停紅燭、待曉堂前拜舅姑、粧罷低聲問夫婿、畫眉深淺入時無、韓偓詩、學梳蟬鬢試新裙、消息佳期在此春、爲愛好多心轉惑、偏將宜稱問傍人、唐伯虎詩、春困無端壓黛眉、梳成鬆鬢出簾遲、手拈茉莉猩紅朵、欲插逢人問可宜、此數作、意趣同歸、唯造語之淺深、自有長短耳、自古詩人構思、不出于人情常況之外、是以其暗合往來如此、所謂閉戶造車、出門合轍矣。

り。

權德輿が詩に、「巫山の雲雨洛川の神、珠攀香腰穩に身に稱ふ、惆悵丁粧成て君見えず、情を含んで起立して傍人に問ふ」と、結意極めて婦女の情狀を説く、象想真に逼る、而して又多く之と相類する者は、朱慶餘が詩に、「洞房昨夜紅燭を停む、曉を待ちて堂前に舅姑を拜す、粧罷て低聲に夫婿に問ふ、畫眉深淺時に入るや無や」と、韓偓が詩に、「蟬鬢を梳るを學んで新裙を試む、消息佳期此春に在り、愛好多きが爲めに心轉た惑ふ、偏に宜稱を將て傍人に問ふ、唐伯虎が詩に、「春困無端無く黛眉を壓す、鬆鬢を梳り成して簾を出ること遅し、手に茉莉の猩紅朵を拈し、挿さんと欲して人に逢ふて可宜を問ふ、此の數作、意趣同歸、唯、造語の淺深、自ら長短有るのみ、古より詩人思を構ふ、人情常況の外に出でず、是を以て其暗合すること往々此の如し、謂はゆる戸を閉ぢて車を造り、門を出でて轍に合ふものなり。」

詩者言之永也、言者心之聲、言不可苟吐、苟吐之爲自欺者也、作詩豈可容易哉。

今人言學宋詩者、多不好溫雅麗密、妄自用己意、種種造出、大抵非擗奇拈僻爲骨董語、定必卑庸陋俗、都墮于胡釘鉸窠窟、此二者眞所謂下劣詩魔也、然皆自謂宋詩正脈在此、豈惟令楊陸輩攢眉、亦當笑破具眼者之口。

前輩語、一經自家咀嚼、語意融變、如自肺腑中流出、更覺一層新致、是詩家好手段、清人有當面青山皆客路之句、胎出山當人面起、客路青山外二句、而合用之、脫換之工、至于此、方纔爲妙。

王介甫云、日高青女尙橫陳、又云、水歸洲渚

詩は言の永きなり、言は心の聲なり、言は苟も吐く可からず、苟も之を吐くは自ら欺くことを爲す者なり、詩を作る豈容易にす可んや。

今人宋詩を學ぶと云ふ者、多くは溫雅麗密を好まず、妄に自ら己が意を用ひ、種々造出す、大抵奇を擗り僻を拈り骨董語を爲すに非ずんば、定めて必、卑庸陋俗、都く胡釘鉸窠窟に墮つ、此の二者眞に謂はゆる下劣の詩魔なり、然も皆自ら宋詩の正脈此に在りと謂ふ、豈惟、楊陸輩に眉を攢せしむるのみならんや、亦當に具眼者の口を笑破すべし。

前輩の語、一たび自家の咀嚼を経て、語意融變し、肺腑中より流出するが如き、更に一層の新致を覺ふ、是れ詩家の好手段、清人、面に當る青山皆客路の句有り、山は人面に當て起り、「客路青山の外」の二句に胎出して、合せて之を用ゆ、脱換の工、此に至りて、方に纔に妙と爲す。

王介甫云ふ、「日高くして青女尙橫陳す、」又云ふ、「水歸て

得橫陳用。楞嚴於橫陳時、味如嚼臘、事、唐李義山小蓮玉體橫陳夜、已報周師入晉陽、唐張薦靈怪集、東蔡女鬼與裴紹祖詩云、橫陳君不御、惟知思不絕、漢魏文章宋玉諷賦、主人之女歌曰、內忱惕兮徂玉牀、橫自陳兮君之旁、橫陳蓋本於此、出猗覺寮雜記、按橫陳臥在之意、又兼竝列之義、宋玉賦、義自分明、中洲集載、任詢巨然山寺詩、孤撐山作碧螺髻、漫散水成蒼玉鱗、野寺荒涼人不到、水光山影正橫陳、亦是竝列臥在之意、又王璿海岳樓詩、有物色橫陳詩卷裡、雲濤飛動酒杯中之句、可參考、明唐時升詠落花、簾外翩躚呈妙舞、枕邊宛轉學橫陳、亦用宋玉句意、李笠翁養苔詩、汲水培苔淺却池、鄰翁拍手

洲渚橫陳を得たり、楞嚴橫陳の時に於て、味嚼臘の如しの事を用ふ、唐の李義山か「小蓮玉體橫陳の夜、已に周師の晉陽に入るを報ず」、唐の張薦が靈怪集に東蔡女鬼の裴紹祖に與ふる詩に云ふ、「橫陳君御せず、惟知る思絶えず」、漢魏文章、宋玉諷賦、主人の女歌に曰く、「内忱として玉牀に徂く、横りて自ら陳す君の旁ら」と横陳は蓋此に本く、猗覺寮雜記に出づ、按に、横陳は臥在の意、又竝列の義を兼ね、宋玉が賦、義自ら分明、中洲集に載す、任詢の巨然山寺の詩、「孤撐山は碧螺髻を作す、漫散水は蒼玉鱗を成す、野寺荒涼人到らず、水光山影正に横陳、亦是れ竝列臥在の意、又王璿の海岳樓の詩に「物色横陳す詩卷の裡、雲濤飛動す酒杯の中」の句有り、參考す可し、明の唐時升の落花を詠するに、「簾外翩躚妙舞を呈し、枕邊宛轉横陳を學ぶ」と、亦宋玉の句意を用ゆ。

李笠翁の苔を養ふ詩に「水を汲み苔を培ふて池を清卻

笑人癡未成斑薛渾難待繞砌頻呼綠拗兒、
余始不知綠拗兒爲何物、後閱花史載王彥
章葺園亭、疊壇種花、急欲苦薛少助野意、而
經年不生、願弟子曰、耐這綠拗兒乃知綠
拗兒指苦薛笠翁本于此。

花史云、陳芸叟嘗雜種異花、圍繞亭樹、散步
花間、霰雪掩映、曰、此我家錦步障也、李後主
每春盛時、梁棟窓壁、柱拱堦砌、竝作隔筒、挿
雜花、榜曰錦洞天、余謂共是風流佳事、可爲
詩家典故。

史達祖詞、雨前樓杏尙秤停、風裏殘梅無顧
藉、周端臣詞、梅梢尙留顧藉、滯東風、未肯雪
輕飄、案、顧藉猶俗語、曰、照顧、有愛護之意、韓
文、香如棄涕唾、無一分顧藉意、又金路中

す、鄒翁手を拍て人の癡を笑ふ、未だ斑薛を成さず渾て
待ちし、砌を繞て頻に呼ぶ綠拗兒と、余始め綠拗兒の
何物たるを知らず、後花史を閲するに、載す、王彥章、園亭
を葺す、壇を疊み花を種る意に苦薛の少く野意を助けん
ことを欲す、而して經年生ぜず、弟子を顧みて曰く、耐へ
巨し這の綠拗兒と、乃、綠拗兒は苦薛を指すを知る笠翁、
此に本づく。

花史に云ふ、陳芸叟嘗て異花を雜へ種きて、亭樹を圍繞
し花間に散步す、霰雪掩映す、曰く、此れ我が家の錦步障
なりと、李後主、春の盛時毎に、梁棟窓壁、柱拱堦砌、竝に隔
筒を作し、雜花を挿み、榜して錦洞天と曰ふ、余謂ふ共に
是れ風流佳事、以て詩家の典故と爲す可し。

史達祖が詞に、雨前の樓杏尙秤停す、風裏の殘梅顧藉無
し、周端臣が詞に、梅梢尙留て顧藉す、東風を滯して未
だ肯て雪輕飄せず、案するに、顧藉は猶ほ俗語に照顧と
曰ふがごとし、愛護の意有り、韓文、香涕唾を棄つるが如
きのみならず、一分顧藉の意無し、又、金の路中顯が母終

顯母臨終、勅中顯之子宣叔曰、汝極諫直言、天子明聖、特覽有所蔽、計他日必復起、汝前事須再言、勿有所顧藉也、又有慰藉字、與顧藉義不大異、范石湖詩、荷風拂簾照蘇我、竹月篩窗慰藉君、沈石田詩、山疑相慰藉、逐逐咲供玩、羅洪先昭君詞、多謝監宮頻慰藉、得恩何似得歸難、後漢書、隗囂傳、報以殊禮、言稱字、用敵國之儀、所以慰藉之良厚、注、慰安也、藉薦也、言安慰而薦藉之也、又陸游詩、多使用無藉在、真咲形骸無藉在、本自陽狂無藉在、醉舞盃盤無藉在、狂吟風月不枝梧、詩酒本來無藉在、形骸況復不枝梧、杜少陵詩、白頭無藉在、朱紱有哀憐、注引千金翼論云、老人之性必恃其老、無有藉在、查綱目集覽、

に臨み中顯の子宣叔を勅めて曰く、汝極諫直言せよ、天子明聖、特に覽く蔽ふ所有り、計るに他日必復起ん、汝が前事須く再言すべし、顧、藉する所有る勿と、又慰藉の字有り、顧藉と義大に異ならず、范石湖が詩に、荷風簾を拂つて我を照蘇し、竹月窓に篩して君を慰藉す、沈石田の詩に、山は疑ふ相慰藉するかと、逐々咲て供玩すと、羅洪先か昭君の詞に、多謝す監宮の頻に慰藉するを、恩を得るは何ぞ歸を得るの難きに似んと、後漢書、隗囂傳に、報するに殊禮を以す、言、字を稱し、敵國の儀を用ふ、之を慰藉する所以、良に厚しと、注に慰は安なり、藉は薦なり、言は之を安慰して薦藉すと、又陸游の詩に、多く無藉在を使用す、真に咲ふ形骸藉在無し、本と自ら陽狂藉在無し、醉舞盃盤藉在無し、狂吟風月枝梧せず、詩酒本來藉在無し、形骸況復枝梧せず、杜少陵の詩に、白頭藉在無し、朱紱哀憐有り、注に千金翼論を引て云ふ、老人の性必ず其老を恃み、藉在有ること無しと、綱目集覽を查するに、身の依る所を藉と曰ふと、案するに無藉在は、依頼する所無きを謂ふなり、即縱放肆逸の意、揚萬里句有り、風は病顛に似て藉在無し、花は中酒の如く惺鬆ならずと。

身之所依曰藉、案、無藉在、謂無所依賴也、卽縱放肆逸之意、楊萬里有句、風似病顛無藉在、花如中酒不惺鬆。

詩中間有拆連熟字而用之、然如明顧清城西門掩夕陽柴、剝啄尋常不用排之句、拆柴門字而倒押之、可爲尤奇矣。

顧清詩題引云、東園餞別、太守酒酣劇論、至於得失寵辱之際、聽之灑然、是夕被酒齒痛不寐、輒用蘇長公過清虛堂韻、歌以揚之、卒章頌言爲將來世講之張本、世講卽世交之謂也、童蒙訓云、同僚之契、交承之分、有兄弟之義、至其子孫、亦世講之、世講所本、蓋此、原詩長篇今不贅。

顧清乙亥元日次韻師邵之詩後句云、茗盃

詩中間、連熟字を拆て之を用ふる有り、然も明の顧清が「城西門は掩ふ夕陽の柴、剝啄尋常排くことを用ひず」の句の如き、柴門の字を拆て倒に之を押す、尤も奇と爲す可し。

顧清が詩の題引に云ふ、東園に餞別す、太守酒酣にして劇論し、得失寵辱の際に至て、之を聴て灑然たり、是の夕酒を被り、齒痛して寐ねられず、輒ち蘇長公の清虛堂に過る韻を用ひ、歌ふて以て之を揚ぐ、卒章の頌言は將來世講の張本と爲すと、世講とは卽世交の謂ひなり、童蒙訓に云ふ、同僚の契、交承の分、兄弟の義有り、其子孫に至ても亦世々之を講すと、世講本づく所、蓋此なり、原詩は長篇、今贅せず。

顧清、乙亥元日師邵之に次韻する詩の後句に云ふ、茗盃

酒盃皆可意、好將新歲作傳生、注云、唐人歲首飲酒名傳生、案、南部新書、長安風俗、元日以後、遞作飲食、相邀號傳坐、本邦風俗、與此寔同、乃亦可曰傳坐。

黃梅之候、謂之梅月、僧貫休詩、梅月多開戶、衣裳潤欲滴、楊萬里詩、梅月如何休得雨、麥秋却是要他晴、袁仲郎詩、好事每供梅月水、清齋長試穀前茶、是也。

本邦俗、立春夜有撒豆驅鬼之事、即謂之攤、明楊循吉除夜雜詠、有撒豆祈兒疾之句、是與今所爲正同。

華人謂書札用一札一行一封字、本邦俗謂之一通、一通字出後漢書、崔寔論、當世便事數十條、名曰政論、仲長統曰、凡爲人主、宜寫

酒盃皆意に可なり、好し新歲を將て傳生を作さんと、注に云ふ、唐人歲首酒を飲む傳生と名づく、案するに、南部新書に長安の風俗、元日以後、遞ひに飲食を作して、相邀へて傳坐と號す、本邦風俗此と寔に同じ、乃亦傳坐と曰ふ可し。

黃梅の候、之を梅月と謂ふ、僧貫休の詩に、梅月多く戸を開き、衣裳潤ふて滴らんと欲す、楊萬里の詩に、梅月如何ぞ雨を休し得ん、麥秋却て是れ他の晴を要す」と、袁仲郎の詩に、好事毎に供す梅月の水、清齋長く試む穀前の茶、と、是れなり。

本邦の俗、立春の夜、豆を撒き鬼を驅るの事有り、即之を攤と謂ふ、明の楊循吉の除夜雜詠に「豆を撒し兒疾を祈る」の句有り、是れ今の爲す所と正に同じ。

華人、書札を謂つて一札一行一封の字を用ふ、本邦の俗之を一通と謂ふ、一通の字、後漢書に出づ、崔寔、當世の便事數十條を論ず、名けて政論と曰ふ、仲長統曰、凡そ人主と爲る、宜く一通を寫して之を坐側に置くべしと、又、典

一通置之坐側、又典略載、臨淄侯植與楊修書云、今往僕少小所著詞譜一通、相與詩中用者、陸龜蒙爲著西齋譜一通、陸游地偏日永閒無事、擬著珍蔬譜一通、皆與今所言少異、書首尾全曰通、猶言一部、而竝無言書札者、明周鼎授沐陽典史、沐陽師次杭州、四明章文仲來謁曰、聞幕下有周鼎奇才、願與之角、沐陽出南征百韻詩、朗誦一遍、各書一通上之、不遺一字云、是短篇亦爲一通、又嘗讀明王龍谿全集、其書內當言某論幾篇、皆作幾通、據此今謂一札爲一通、亦爲當。

老學庵筆記云、沈醉謂之倒載、晉山簡爲荊州牧、每出、酣唱而歸、人歌曰、山翁住何處、來往高陽池、日夕倒載歸、酩酊無所知、余案、倒

略に載す、臨淄侯植、楊修に與ふる書に云ふ、今往僕少小著す所の詞譜一通、相與にすと、詩中用ふる者、陸龜蒙の「爲めに著す西齋の譜一通」、陸游の「地偏に日永くして閒にして事無し、著さんと擬す珍蔬の譜一通」と、皆今の言ふ所と少しく異なり、書の首尾全きを通と曰ふ、猶一部と言ふがごとし、竝に書札を言ふ者無し、明の周鼎、沐陽の典史を授く、沐陽の師杭州に次す、四明章文仲來謁して曰く、聞く幕下に周鼎奇才有り、願くば之と角はんと、沐陽、南征百韻の詩を出だす、朗誦一遍、各一通を書し之を上ぐ、一字を遺さずと云ふ、是れ短篇にして亦一通と爲すと、又嘗て明の王龍谿全集を讀むに、其書內當に某論幾篇と言ふべし、皆幾通に作る、此に據れば今、一札を謂て一通と爲す、亦當れりと爲す。

老學庵筆記に云ふ、沈醉之を倒載と謂ふ、晉の山簡、荊州の牧と爲る、出る毎に、酣唱して歸る、人歌て曰く、山翁何の處に住す、來往す高陽池、日夕倒載して歸る、酩酊して知る所無し」と、余案するに倒載の字は樂記に干戈を倒

載字本於樂記倒載干戈包之以虎皮之語、
 車上醉倒之謂、馬紹詩與洽杯停晚方還倒
 載車是可證、其他戴叔倫詩、當時不敢辭先
 醉、誤逐群公倒載歸、張登詩、且同山簡醉、倒
 載莫、寒帷、陳基詩、將軍奏罷平西捷、還許山
 翁倒載歸、陳緝詩、山簡歸時應倒載、條侯醉
 後尙談兵、數句皆同義。

梅堯臣時樵童野犬迎人後、山葛棠梨酒、案酒
 時、案酒字新奇、猶言下物、俗語謂之下酒、陸
 機草木疏云、苻接余也、白莖紫赤、圓徑寸餘、
 浮水上、根在水底、與水深淺、莖大如釵股、上
 青下白、煮其白莖、以苦酒浸之、脆美可、案酒、
 堯臣用此。

杜少陵有「白鳥去邊明之句、妙趣在於一明

載して之を包むに虎皮を以すの語に本く、車上醉倒の謂
 なり、馬紹の詩に「興洽くして杯の停ること晚し、方に還
 て倒に車に載す」と、是れ證す可し、其他戴叔倫の詩に、當
 時敢て先づ醉ふを辭せず、誤て羣公を逐ふて倒載して歸
 る」と、張登の詩に「且らく山簡の醉に同じくし、倒載して
 帷を襲ること莫れ」と、陳基の詩に「將軍奏し罷む平西の
 捷、還た許す山翁の倒載して歸るを」と、陳緝の詩に「山簡
 歸る時應に倒載すべし、條侯醉後尙兵を談す」と、數句皆
 義を同うす。

梅堯臣の詩に、「樵童野犬人を迎ふ後、山葛棠梨酒を案す
 る」と案酒の字新奇なり、猶、下物と言ふがごとし、俗語
 に之を下酒と謂ふ、陸機の草木疏に云ふ、苻は接余なり、
 白莖紫赤、圓徑寸餘、水上に浮び、根は水底に在り、水と深
 淺す、莖の大は釵股の如し、上青く下白し、其白莖を煮て、
 苦酒を以て之を浸せば、脆美にして案酒す可しと、堯臣
 此を用ゆ。

杜少陵に「白鳥去邊明なり」の句有り、妙趣一の明の字に

字、後人多製、陷于此者、宋人驚詩飛入、白雲、
渾不辨、碧山橫處忽分明、眞山民詩、澗暗只
聞泉滴瀝、山青騰見鷺分明、金党懷英避人
白鳥忽驚去、雙影飛翻明翠岑、三作構意共
同、唯党造句頗涉淺拙、最爲下等矣。

近人好用奇字、蓋六如老納爲之張本、是學
宋詩者之弊病也、奇字固不可不知、而又不可
妄用之、平常多見以蓄之胸裡、當其寫狀
景物之時、而不覺融出、不期於奇險、而自奇
險、語意渾然無斧鑿可求、則奇字雖多、亦何
所妨、近人不然、作意欲奇、特擗瘡字面、以爲
粧飾、是以或首尾淺易中、唐突擡入而更覺
語脈支離、猶是補木綿蔽衣、以錦段、全具不
相稱、語云、鍊字不如鍊句、鍊句不如鍊意、鍊

在り、後人此を襲蹈する者多し、宋人驚の詩に、飛で白雲
に入りて渾て辨ぜず、碧山横はる處忽ち分明、眞山民の
詩に「澗暗くして只聞く泉滴瀝、山青くして騰さへ見る
鷺分明」と、金の党懷英の「人を避る白鳥忽驚き去る、雙影
飛翻て翠岑に明なり、」と三作構意共に同じ、唯党が造句
頗る淺拙に涉る、最も下等と爲すと。

近人好んで奇字を用ふ、蓋、六如老納、之れが張本を爲す
是れ宋詩を學ぶ者の弊病なり、奇字は固より知らざる可
からず、而して又妄に之を用ゆ可からず、平常多く見て
以て之を胸裡に蓄へ、其景物を寫狀するの時に當て、覺
えず融出し、奇險を期せずして、自ら奇險、語意渾然とし
て斧鑿の求む可き無し、則奇字多しと雖も、亦何の妨ぐ
る所ならん、近人は然らず、作意、奇を欲し、特に字面を擗
瘡し、以て粧飾を爲す、是を以て或は首尾淺易中、唐突擡
入して更に語脈の支離を覺ゆ、猶、是れ木綿蔽衣を補ふ
に錦段を以てするがごとし、全具相稱はず、語に云ふ、字
を鍊るは句を鍊るに如かず、句を鍊るは意を鍊るに如
かずと、意を鍊れば則字句皆妙にして、痕跡の見る可き無

意則字句皆妙、無痕跡可見。

古人云、論詩如品花木、牡丹芍藥、下逮苦棟、刺桐、皆有天然一種風韻、今之學杜者、紙牡丹芍藥耳、寔可謂的論。

董玄宰論書、晉人取韻、唐人取法、宋人取意、此言雖書道、亦是與詩家同一關紐、大概如此。

陸游詩、殘花滿地無餘夢、新筍掀泥已鬣尖、楊孟載詩、小雨送花青見萼、輕雷催笋碧抽尖、二作同押、用意一轍、而陸則直而乏景趣、楊則曲而有興致、詩人須參考、則思過半矣。勞遠歸者置酒、謂之軟脚酒、見東坡詩、還來須置軟脚酒、爲君擊鼓行金樽、注云、郭子儀自同州歸、代宗詔大臣就宅作軟脚局、人出

し。古人云ふを論ずるは花木を品するが如し、牡丹芍藥、下、苦棟刺桐に逮ぶまで、皆天然一種の風韻有り、今の杜を學ぶ者は、紙牡丹芍藥のみと、寔に的論と謂ふ可し。董玄宰、書を論ず、晉人は韻を取り、唐人は法を取り、宋人は意を取る、此の言は書道なりと雖も、亦是れ詩家と同一關紐、大概此の如し。

陸游の詩に「殘花地に滿ち餘夢無く、新筍泥を掀て已に尖を露す、楊孟載の詩に、小雨花を送りて青萼を見る、輕雷笋を催して碧尖を抽く、二作同押、用意一轍、而して陸は則直にして景趣に乏し、楊は則曲にして興致有り、詩人は須らく參考すべし、則思半に過ぎん。

遠歸の者を勞して酒を置く、之を軟脚酒と謂ふ、東坡の詩に見ゆ、遠り來て須らく軟脚酒を置くべし、君が爲めに鼓を擊ちて金樽を行らんと、注に云ふ、郭子儀同州より歸る、代宗大臣に詔して宅に就き軟脚局を作り、人ど

三千、案是謂養歌行脚之疲令和軟爲軟脚、又不必言遠歸、金李獻能玉華谷同希顔之行韻詩云、玉龍落峽噴飛流、空翠霏霏晚不分、軟脚山堂一壺酒、暮涼閑對兩峰秋、又高次、韻楊孟載早春見寄、古詩後四句云、范莊紅杏幾株在、好待開時同折燃、對花憂惠不須言、剩喚一盃供脚軟、倒用義同。

養殘小語云、朱竹垞詞、下九同嬉戲、用古樂府初七及下九嬉戲莫相忘也、九爲陽數、古人以二十九日爲上九、初九日爲中九、十九日爲下九、每月下九置酒爲婦女之歡、名曰陽會、蓋女子陰也、得陽以成、此說見瑯環記、第不知初七更作何義耳、今按、方秋厓詩、上巳日爲人、雲蒸澗壑春、是稱人日爲上七、初

とに三千を出さしむ案するに是れ行脚の疲を養歌して和軟ならしむるを謂つて軟脚と爲す、又必ずしも遠歸を言はず、金の李獻能玉華谷に希顔之と同じく分韻する詩に云ふ、玉龍峽に落ちて飛流を噴く、空翠霏々晩に收まらず、軟脚山堂一壺の酒、暮涼閑に對す兩峰の秋と、又高啓の楊孟載が早春に寄せらるるに次韻する古詩の後四句に云ふ、范莊の紅杏幾株か、在る、好し開時を待ちて同く折燃せん、花に對して憂惠言ふを須ひず、剩へ一盃を喚んで脚軟に供せん」と、倒用義同し。

養殘小語に云ふ、朱竹垞が詞に、下九同く嬉戲すと、古樂府の「初七及び下九嬉戲相忘ると莫れを用ふるなり、九は陽數たり、古人二十九日を以て上九と爲し、初九日を中九と爲し、十九日を下九と爲す、毎月下九には置酒して婦女の歡を爲す、名づけて陽會と曰ふ、蓋女子は陰なり、陽を得て以て成す、此説は瑯環記に見ゆ、第、初七の更に何の義を作すを知らざるのみ、今按するに、方秋厓が詩に、上七日人と爲す、雲は蒸す澗壑の春」と、是れ人日を稱して上七と爲す、初七は即ち上七なり、玉案の知新日録にも亦秋暉が詩を引く、云ふ、吾郡人日を上七と稱す

七郎上七也、王棠知新日錄亦引秋臣詩云、吾郡人日稱上七、又云、正月初九謂之上九、而引古樂府證來歷、則上九與前說不同、不知孰爲是也。

俗語有猜拳字、詩中用者、元姚文興詩、曉涼船過柳洲東、荷花香裡偶相逢、剝將蓮子猜拳子、玉手雙開不賭空、東皐雜記云、城頭椎鼓傳花枝、廊上搏拳握松子、搏音屯、非搏也、卽今猜拳出、知新日錄按、明顧瑛有分曹賭酒詩爲令、狎坐猜花手作闌之句、亦曰猜拳、古稱之迷闌、韓偓詩、闌草當更僕、迷闌誤達晨、是也、猜卽隱度占射之義、明寧獻王宮詞云、新選昭儀進御來、女官爭簇上平臺、宮中未識他名姓、都把花名作字猜、構意在猜字

と、又云ふ正月初九之を上九と謂ふ、古樂府を引て來歴を證す、則ち上九前說と同じからず、孰れか是と爲すを知らざるなり。

俗語に猜拳の字有り、詩中に用ふる者、元の姚文興の詩に、曉涼の船は過ぐ柳洲の東、荷花香裡偶相逢ふ、蓮子を剝き將て拳子を猜す、玉手雙開して空を賭せず、と、東皐雜記に云ふ、城頭鼓を椎して花枝を傳ふ、廊上拳を搏して松子を握ると、搏音屯、搏に非るなり、卽今の猜拳は知新日錄に出づ、按ずるに、明の顧瑛「曹を分ち酒を賭して詩令を爲す、狎坐花を猜して手闌を作す」の句有り、亦猜拳を曰ふ、古之を迷闌と稱す、韓偓が詩に、草を闌はず當に僕を更ふべし、迷闌誤て晨に達すと、是れなり、猜は卽隱度占射の義、明の寧獻王の宮詞に云ふ、新に昭儀を選んで御に進み來る、女官争ひ簇つて平臺に上る、宮中未だ識らず他の名姓、都把花名を把て字猜を作すと、構意猜字の上り在て工を著く、新奇喜ぶ可し、故に併せて此に載す。

上著工、新奇可喜、故伊載于此。

蒲團字往往倒置用之、蘇東坡詩擁褐坐睡
依團蒲、黃山谷曲几團蒲聽煮湯、又團蒲日
靜鳥吟時、韓駒茅齋紙帳施團蒲、方岳竹庵
終日一團蒲、孫賁疑神坐忘隱團蒲、數句並
言蒲團也、然金劉仲尹有不出詩、好詩讀罷
倚團蒲、唧唧銅餅沸地爐、天氣稍寒吾不出、
氈毳分坐與狸奴、據此團蒲未必概爲蒲團、
又或有別、不然則此詩下句用氈毳而上又
言蒲團、於理不當、虞兆隆天香樓偶得云、團
蒲卽蒲團、是也、然亦有別、佛家趺坐者爲團
蒲、此則牀帳中憑倚之圓枕也、用細絹包裹
曰隱囊、以蒲爲之曰團蒲、劉仲尹所用、蓋言
此也。

蒲團の字往往倒置して之を用ゆ、蘇東坡の詩に、「褐を擁
して坐睡し團蒲に依る」、黃山谷が「曲几團蒲湯を煮るを
聽く」、又「團蒲日靜なり鳥吟の時」、韓駒が「茅齋紙帳團蒲
を施す」、方岳が「竹庵終日一團蒲」、孫賁が「神を凝らして
坐忘團蒲に隱る」、數句並に蒲團を言ふなり、然ども金劉
仲尹「不出」の詩有り、「好詩讀み罷んで團蒲に倚る、唧々と
して銅餅地爐に沸く、天氣稍寒くして吾出でず、氈毳坐
を分て狸奴に與ふ」と此に據れば團蒲未だ必しも概して
蒲團と爲さず、又或は別有らん、然らずんば則此の詩の
下句氈毳を用ふ、而して上又蒲團を言ふ、理に於て當ら
ず、虞兆隆の天香樓偶得に云ふ、蒲團は卽蒲團、是れなり
と、然れども亦別あり、佛家に趺坐する者を蒲團と爲す
此れ則牀帳中憑倚の圓枕なり、細絹を用ひ包裹するを
隱囊と曰ふ、蒲を以て之を爲るを團蒲と曰ふ、劉仲尹の
用ふる所、蓋、此を言ふなり。

明孫大雅作菽乳詩曰豆腐本漢淮南王安所作惜其名不雅余爲改今名因賦此詩淮南信佳士思仙築高臺八老變童顏鴻寶枕中開異方營齊味數度真琦塊作羹傳世人令我憶蓬萊茹葷厭葱韭此物乃呈才戎菽來南山清漪浣淨埃轉身一旋磨流膏入盆鼻大釜氣浮浮小眼湯洄洄頃得晴浪翻坐見雪花皚青鹽化液滴絳蠟竄煙煤霍霍磨昆吾白玉大片裁烹煎適吾口不長老齒摧蒸豚亦何爲人乳聖所哀萬錢同一飽斯言匪俳談新篇入題句亦佳矣豆腐一名小宰羊清異錄云時戢爲青陽丞潔已勸民肉味不給日市豆腐數箇邑人呼豆腐爲小宰羊又花史豆經磨腐其屑尙可作蔬持齋者號

明の孫大雅菽乳の詩を作りて曰く豆腐は本と漢の淮南王安が作る所、其名の雅ならざるを惜む、余爲に今の名に改む、因て此詩を賦す、淮南信に佳士、仙を思ふて高臺を築く、八老童顔に變す、鴻寶枕中に開く、異方齊味を營み、數度眞に琦塊、羹を作して世人に傳ふ、我をして蓬萊を憶はしむ、葷を茹ふて葱韭を厭ふ、此物乃ち才を呈す、戎菽南山に來る、清漪浮埃を流す、轉身一旋磨流膏盆に入ると、大釜氣浮々、小眼湯洄々、頃得る晴浪の翻るを、坐して見る雪花の皚きを、青鹽液滴に化し、絳蠟煙煤を竄す、霍々昆吾を磨し、白玉大片に裁す、烹煎吾口に適す、長れず老齒の摧るを、蒸豚亦何か爲ん、人乳は聖の哀む所、萬錢同一飽す、斯言俳談に匪ずと、新篇題に入りて句も亦佳なり、豆腐一に小宰羊と名づく、清異錄に云ふ、時戢青陽丞と爲り、已を潔して民を勸む、肉味給せず、日に豆腐數箇を市ふ、邑人豆腐を呼て小宰羊と爲す、又花史に豆腐を磨て、其屑尙蔬と作す可し、持齋者號して雪花菜と爲す、楊萬里樂平縣を過ぐ時に云ふ、笋蕨都て無くして且則休す、齊半葉無くして也た羞るに堪へたり、滿城都て賣る雪花菜、昨日の愁人未だ是れ愁ひずと、獨、此に用ふ。

爲雪花菜、楊萬里過樂平縣詩云、笋蕨都無
且則休、薺無半葉也、堪羞滿城都賣雪花菜、
昨日愁人未是愁、獨用于此。

杜荀鶴詩、出爲羈孤、糲食、歸同弟姪、讀生
書、生書字新、生熱之生、已讀之書、謂之熟書、
生書即謂未讀之書也。

劉仲尹夏日詩、牀頭書冊聚麻沙、病起經句
不煮茶、更爲炎蒸設、方略、細煮山蜜、破松花、
麻沙字用爲婆娑之義、老學庵筆記、載麻沙
板事、麻沙與之不同、蓋書坊之名、方輿勝覽
云、崇安麻沙二坊之書行于天下、即是也。

清田蘇詩、花飛兩目苦昏曠、把卷惟宜坐、日
中、雙鸞一雙新、上額、挑燈猶作蠹書蟲、又田
蘇詩、李冠石自陽山以眼鏡寄惠、賦謝云、雙鸞

杜荀鶴の詩に、「出でて羈孤と爲りて糲食を營む、歸りて
弟姪と同じく生書を讀む」と、生書の字新なり、生熱の生
なり、已に讀むの書之を熟書と謂ふ、生書は即未讀の書
を謂ふなり。

劉仲尹の夏日の詩に、牀頭書冊聚て麻沙たり、病起を句
經て茶を煮ず、更に炎蒸の爲めに方略を設く、細に山蜜
を煮て松花を破す」と、麻沙の字用ひて婆娑の義と爲す、
老學庵筆記に、麻沙板の事を載す、麻沙は之れと同じか
らず、蓋書坊の名ならん、方輿勝覽に云ふ、崇安麻沙二坊
の書、天下に行はると、即是れなり。

清の田蘇の詩に、花飛で兩目昏曠を苦む、卷を把て惟、宜
く日中に坐すべし、雙鸞一雙新に額に上る、燈を挑けて
猶ほ蠹書蟲と作る、又田蘇が李冠石が陽山より眼鏡を
以て寄せ惠む賦して謝するに云ふ、雙鸞將ち來る萬里

將來萬里程昏昏老眼得重明故人知我添
新恙不是心盲是目盲六如葛原詩話載此
詩發矐即眼鏡也收入詩語爲所罕見也嘗
閱慎懋官華夷花木考載髮矐其言具備並
錄于此提學副使潮陽林公有二物如大錢
形質薄而透明如硝子石如琉璃色如雲母
每見文章目力昏倦不辨細書以掩目精神
不散筆書倍明中用綾絹聯之縛于腦後人
皆不識舉以問余余曰此髮矐也出于西域
滿刺加國或聞公得自南海賈胡必是無疑
矣後見張公方洲雜錄與此正同云見宣廟
賜胡宗伯物卽此以金相輪廓而衍之爲柄
紐制其末合則爲一岐則爲二如市肆中等
子匣蓋髮矐乃輕雲貌如輕雲之籠日月不

程昏昏老眼重明を得たり故人我が新恙を添ゆるを知
る是れ心盲ならず是れ目盲なり六如が葛原詩話に此
詩を載す髮矐は卽ち眼鏡なり收めて詩語に入る罕に
見る所と爲す嘗て慎懋官が華夷花木考を閱するに髮
矐を載す其言具に備はる茲に此に録す提學副使潮陽
林公二物有り大錢の如し形質薄くして透明硝子石の
如し琉璃色の如く雲母の如し毎に文章を見るに目力
昏倦して細書を辨ぜず以て目を掩へば精神散ぜず筆
畫倍明かなり中に綾絹を用ゆ之を聯して腦後に縛す
人皆識らず舉げて以て余に問ふ余曰く此れ髮矐なり
西域滿刺加國に出づ或は聞く公南海賈胡より得と必
是疑ひ無し後に張公が方洲雜錄を見るに此と正に同
じと云ふ宣廟の胡宗伯に賜ふ物を見るに卽ち此れ金相
輪を以て廓して之を衍し柄と爲す紐其末を制し合せ
ば則一と爲り岐せば則二と爲る市肆中等子匣の如し
蓋髮矐は乃輕雲貌は輕雲の日月を籠めて其明を掩は
ざるが如し若し髮矐に作るも亦可なり

掩其明也。若作「曖曖」亦可。

花木考載、惜花人別、花人之二篇、種說愛花之情狀、文意雅逸、頗可愛誦、可知古人襟抱風流有餘也。惜花人篇曰、種花而弗愛、猶弗種也。愛花而弗惜、猶弗愛也。愛有貪情、惜兼痛意、辟諸學、知不如好、好不如樂也。古之括香使、司花女、移春檻、選勝亭、買之千金、賜之九錫、無非愛之深耳。懸金鈴、燒紅燭、付酒盞、藉枕幃、武仲不啓關、子美不掃徑、無非惜之至耳。韓子云、直把春債酒、都將命乞花、禪家所謂觸緣、受緣、愛緣、愛緣取、有生老死十二因緣、不能解脫者、此也。杜子美云、一片花飛滅却春、花飄萬點正愁人、所謂從愛生愛者也。又云、且看欲盡花經眼、莫厭傷多酒入唇

花木考に花を惜む人、花に別る人の二篇を載す、極て花を愛するの情狀を記し、文意雅逸、頗る愛誦すべし、知る可し。古人襟抱風流餘有るなり、花を惜む人の篇に曰く、花を種て愛せざるは、猶種まざるがごときなり、花を愛して惜まざるは、猶愛せざるが如きなり、愛に貪情有り、惜に痛意を兼ぬ、之を學に辟ふるに、知は好むに如かず、好むは樂むに如かず、古の括香使、司花女、移春檻、選勝亭之々千金に買ひ、之に九錫を賜ふ、愛の深きに非る無し、金鈴を懸け、紅燭を燒き、酒盞に付し、枕幃に藉く、武仲關を啓かず、子美徑を掃はず、惜に至に非る無し、韓子云ふ、直ちに春を把て酒に償ふ、都て命を將て花を乞ふ、武家の謂はゆる觸は愛に緣り、受は愛に緣る、愛は取に緣る、有生老死十二因緣、解脫する能はざる者は此れなり、杜子美云ふ、一片花飛ぶも春を滅却す、花は萬點を飄して正に人を愁へしむと、謂はゆる愛より愛を生ずる者なり、又云ふ、且つ看よ豔んと欲して花眼を經、厭ふ莫れ多を傷て、酒罈に入る」と、謂はゆる愛により愛を生ずる者なり、綺窓紛々として奈何ともす可き無し、花と命を爲す者に非んば、又何ぞ以て之を知るに足んや、甲子

所謂從愛生愛者也。綺窗紛紛無可奈何。非與花爲命者。又何足以知之也哉。甲子春三月六日。香宇薔薇十二屏花開甚盛。黃昏風雨大作。無策蔽覆。勉強就枕。子玳趨田子起曰。爭忍群芳落莫耶。亟宜秉燭往探平安也。至則紅愁綠慘。俛首垂泣。若訴若怨。不忍相見者。田子方太息。而子玳忽輟然大笑。田子曰。何謂也。子玳曰。獨不念蘇子之詩乎。曰。蘇子詩云。何因長吟曰。東風陳陳泛寒光。大雨沈沈水滿廊。只恐夜深花褪去。故燒高燭照紅粧。子藝不覺抵掌絕倒。持燭翻滅。徘徊於惜者久之。忍寒不能反。且曰。此大佳話也。不可無紀。遂口占一篇。用慰花神云耳。雨過三日。便爲霖。何況春來兩月陰。撫景忽思燒燭

春三月六日。香宇薔薇十二屏花開。甚盛。黃昏風雨大。作。無策蔽覆。勉強就枕。子玳趨田子起曰。爭忍群芳落莫耶。亟宜秉燭往探平安也。至則紅愁綠慘。俛首垂泣。若訴若怨。不忍相見者。田子方太息。而子玳忽輟然大笑。田子曰。何謂也。子玳曰。獨不念蘇子之詩乎。曰。蘇子詩云。何因長吟曰。東風陳陳泛寒光。大雨沈沈水滿廊。只恐夜深花褪去。故燒高燭照紅粧。子藝不覺抵掌絕倒。持燭翻滅。徘徊於惜者久之。忍寒不能反。且曰。此大佳話也。不可無紀。遂口占一篇。用慰花神云耳。雨過三日。便爲霖。何況春來兩月陰。撫景忽思燒燭。味。眠らず重て起つ花を惜む心。紅粧冷落燈光灑。翠屋淋漓夜色深。病を扶けて細君能く事を解す。當年誰か復

味、不眠重起惜花心、紅粧冷落燈光濕、翠屋
 淋漓夜色深、扶病細君能解事、當年誰復伴
 知音、噫亦庶幾不負賞花者矣、榭、吞細切、上
 聲、水流物去也、其去聲卽爲榭、蓋方言也、今
 案、東坡詩、諸本所載與此不同、起承句、作東
 風渺渺泛崇光、香霧空濛月轉廊、榭去又作
 睡去、異同何由如此可疑矣、東風大雨二句、
 語意淺近、不如香霧空濛爲幽麗稍優、且花
 木考所載、於榭去字上最著眼、而比之睡去、
 却欠景情、諸本所作、當以爲正矣、雖然花木
 考亦有据依、榭字用從上聲、所未曾見也、備
 可以爲後來一證、別花人篇曰、惜花人固難
 得、而別花人亦難得、未有能別花而不惜花
 者、今俗人不惟不種花、雖好事種之、彼亦不

知音に伴はん、噫亦庶幾くば花を賞する者に負かさ
 らん、榭は香の切、上聲、水物を流し去るなり、其去聲は即榭
 と爲す、蓋方言なり、今案するに、東坡が詩諸本載する所
 此と同じからず、起承の句、東風渺々として崇光泛々、香
 霧空濛月廊に轉ずに作る、榭去、又、睡去に作る、異同何に
 由りて此如きや、疑ふ可し、東風大雨の二句、語意淺近、香
 霧空濛の幽麗稍優れりと爲すに如かず、且花木考載する
 所、榭去の字の上に於て最眼を著く、而して之を睡去に
 比すれば却て景情を欠く、諸本作る所、當に以て正と爲
 すべし、然と雖、花木考も亦据依有らん、榭字用て上聲に
 従ふ、未だ曾て見ざる所なり、備て以て後來の一證と爲
 す可し、花に別るゝ人の篇に曰く、花を惜む人固より得
 難し、花に別る人亦得難し、未だ能く花に別て花を惜ま
 ざる者有らず、今俗人惟、花を種をざるのみならず、好事
 之を種うると雖も彼亦其名を知らず、之を視ること凡草
 の如く、之を鄙むこと惡木の如し、眞に殺風景なり、古人
 の花に別る人を得難しと謂へる所以なり、夫れ安薇蕪薇

知其名、親之如凡草、鄙之如惡木、真殺風景也。所以古人謂難得別花人、夫紫薇薔薇、特常植耳、而白樂天猶惜之、故其詩曰、除却微之見、應愛世間少、有別花人、又云、移他到此須爲主、不別花人、莫使看、是則太傅可謂之別花主、而微之可謂之別花人矣。然古之文人、亦有極殺風景事、蓋折花極俗人惡事也、而蘇子瞻、歐陽永叔亦嘗犯之、子瞻在東武、南禪資福寺大會賓客、剪芍藥七千餘朵置瓶盎中、供佛賞翫、永叔在揚州會客、取荷花千朵、插畫盆中、圍繞坐席、命客傳花、人摘一葉、盡處飲酒、此皆忍心人也、惜花之情安在、余嘗于花開日、大書粉牌、懸諸花間、曰名花猶美人也、可翫而不可褻、可愛而不可折、擷

は特に常植のみ、而して白樂天猶之を惜む、故に其詩に曰く、微之を除却して應に愛すべきを見る、世間花に別る人有る少し、又云ふ、他を移して此に到て須らく主と爲るべし、花に別るゝ人にあらんば看せしむる莫れ、と是れ則太傅之を花に別る主と謂ふ可し、而して微之は之を花に別る人と謂ふ可し、然れども古の文人、亦極めて殺風景の事有り、蓋花を折るは極て俗人惡事なり、而して蘇子瞻、歐陽永叔も亦嘗て之を犯す、子瞻、東武の南禪資福寺に在り、大に賓客を會す、芍藥七千餘朵を剪り、瓶盎中に置き、佛に供して賞翫す、永叔揚州に在て客を會して荷花千朵を取り、畫盆中に挿み、坐席を圍繞す、客に命じて花を傳へ、人一葉を摘む、盡る處酒を飲む、此皆忍心の人なり、花を惜むの情安にか在る、余嘗花の開く日に于て粉牌に大書し、諸を花間に懸く、曰く名花は猶美人のごとし、翫ぶ可くして褻る可からず、愛す可くして折る可からず、葉一辨を擷する者は、是れ美人の裳を裂くなり、花一痕を摺む者は、是れ美人の膚を撻ますなり

葉一瓣者、是裂美人之裳也、搯花一痕者、是
 搯美人之膚也、拗花一枝者、是折美人之眩
 也、以酒噴花者、是唾美人之面也、以香觸花
 是薰美人之目也、解衣對花、狼藉可厭者、是
 與美人裸裸相逐也、近而覷者、謂之官、屈而
 嗅、謂之齷、語曰、寧逢惡獾莫殺風景、論而不
 省、誓不再請、嗚呼、此雖戲詞、無非憐芳菲而
 惜香豔耳、余亦甚愛花、園庭種衆花木、每盛
 開、書此語、以爲花前甲令。

花一枝を拗る者は、是れ美人の眩を折るなり、酒を以て
 花に噴く者は、是れ美人の面に唾くたり、香を以て花に觸
 る、是れ美人の目を薰するなり、衣を解いて花に對し、狼
 藉厭ふ可き者は、是れ美人と裸裸相逐ふなり、近いて覷ふ
 者は之を官と謂ふ、屈して嗅ぐ之を齷と謂ふ、語に曰く、
 寧、惡獾に逢ふも殺風景すること莫れ、論して省せず、誓
 て再び請はず、嗚呼此れ戲詞と雖も、芳菲を憐んで香豔
 を惜むに非ざること無きのみ、余も亦甚花を愛し園庭
 に衆花木を種ゑ、盛んに開く毎に、此の語を書し、以て花
 前の甲令と爲す。

梧窓詩話卷一終

日本詩話叢書

梧窓詩話卷二

孫坡 林瑜孚尹著

一川豊年意、比屋闢雞犬、柴荆闢桃李、冥冥一川花、雪詩、天工妙莊嚴、施此一川雪、范石湖句也、乞與畫工團扇本、青林紅樹一川秋、陸放翁句也、霜紅半臉金嬰子、雪白一川蕎麥花、映出一川桃李好、只消外面矮青山、一川黃犢朝朝飽、岸草何曾減、寸青楊誠齋句也、又金闕鐘詩、四面雲山玉作圍、一川霜樹錦爲衣、元麻革詩、一川風雨獨柴荆、葛原詩話解、一川字、爲一面之意、就釋蕉中說、查證、李強、頗涉杜撰、三國志胡昭傳云、孫狼等爲、

「一川豊年の意、比屋雞犬闢し、柴荆桃李に闢しく、冥々一川の花、雪の詩、天工妙莊嚴なり、此一川の雪を施す、范石湖が句なり、畫工に團扇の本を乞與す、青林紅樹一川の秋、陸放翁が句なり、霜は紅なり半臉金嬰子、雪は白し一川蕎麥の花、映し出だす一川桃李の好きを、只消ゆ外面矮青の山、一川黃犢朝々飽く、岸草何ぞ曾て寸青を減ぜん、楊誠齋か句なり、又金の闕鐘が詩に、四面の雲山玉、圍を作す、一川の霜樹錦、衣を爲す、元の麻革が詩に、一川の風雨、獨、柴荆」と、葛原詩話に一川の字を解して一面の意と爲す、釋蕉中が說を載す、查證李強、頗る杜撰に涉る、三國志胡昭が傳に云ふ、孫狼等叛亂を爲す、遂に南、關羽、に附く、羽印を授け兵を給し、還て賊寇を爲す

叛亂、遂南附關羽、羽授印給兵、還爲賊寇、到陸南長樂亭、自約誓言、胡居士賢者也、一不得犯其部落、一川賴昭、咸無怖惕、方知一川語、古昔已有、今案、猶曰、一村一鄉、又山中一夕話、有一川官語、朱子語類有一川僧字、亦皆同義、據此、詩句所用、解爲村鄉之義、句意自判然、古人解書失之目睫者、聞不鈔。

元稹詩、憶得雙文籠月下、小樓前後促迷藏、是用明皇之事、致虛閣雜俎云、唐明皇與玉眞、恆於皎月之下、以錦帕裹目、在方丈之間、互相捉戲、謂之捉迷藏、又有單言迷藏、高啓戲嬰圖、隨人貪作劇、避伴學迷藏、乃是別事、非言捉迷藏、而後人誤爲同事、案本邦兒伴相聚、各處躲藏、而一人追蹤探伺之、有所探

陸南の長樂亭に到り、自ら約誓して言ふ、胡居士は賢者なり、一も其部落を犯すを得ず、一川昭に頼て、咸怖惕無しと、方に知る一川の語、古昔より已に有るを、今案するに猶ほ一村一郷と曰ふがごとし、又山中一夕話に、一川の語有り、朱子語類に一川僧の字有り、亦皆同義、此に據るに、詩句用ふる所、解して村郷の義と爲さば、句意自ら判然たり、古人書を解するに之を目睫に失する者、聞、鈔からず。

元稹が詩に、憶ひ得たり、雙文籠月の下、小樓前後促迷藏と、是れ明皇の事を用ゆ、致虛閣雜俎に云ふ、唐の明皇玉眞と恆に皎月の下に於て、錦帕を以て目を裹つ、方丈の間に在り、互に相捉戲す、之を捉迷藏と謂ふ、又單に迷藏と言ふ有り、高啓が戲嬰の圖に、人に隨ひ貪て劇を作す、伴を避けて迷藏を學ぶ、乃是れ別事、捉迷藏を言ふに非ず、而して後人誤りて同事と爲す、案するに本邦兒伴相聚、各處に躲藏し、而して一人踪を追ひ之を探伺す、探り得る所有れば、復其れをして代りて探伺者と爲らしむること初の如し、以て籍戲を爲す、迷藏、恐くは此の如き

得復令其代爲探伺者如初、以爲嬉戲、迷藏
 恐如此之類、明徐嬾和廣續隱詩、有咏迷藏
 云、檻外深潛砌外藏、輕紗微濕露溥香、隔花
 女伴窺雙影、竟得儂時也得郎、乃可證高啓
 避伴句、亦言此也、又黃山谷次韻文潛同遊
 王舍人園詩句云、移竹淇園下、買花洛水陽、
 風煙二十年、花竹可迷藏、袁仲郎雌雷方喚
 醒女魃乍迷藏、二作共用迷藏、但爲隱藏之
 義、迷與迷圃之迷同、過庭錄所載題扇上小
 兒迷藏詩、誰剪輕紈巧織絲、春深庭院作兒
 嬉、路郎有意嘲輕脫、只有迷藏不入詩、以迷
 藏爲捉迷藏、誤矣、

張籍寒食內宴詩後四句云、千官盡醉猶教
 坐、百戲皆呈未放回、共喜拜恩侵夜出、金吾

の類ならん、明の徐嬾の廣續隱に和する詩に、迷藏を咏する有り云ふ、檻外深く潛み砌外に藏る、輕紗微く濕ふて露、香を溥す花を隔つる女伴、雙影を窺ふ儂を竟め得る時也、た郎を得たりと、乃ち證す可し、高啓の伴を避るの句も、亦此を言ふなり、又黃山谷、文潛が同じく王舍人の園に遊ぶに次韻する詩の句に云ふ、竹を移す淇園の下花を買ふ洛水の陽、風煙二十年、花竹迷藏す可しと、袁仲郎が、雌雷方に喚び醒す、女魃乍迷藏すと、二作共に迷藏を用ひて、但、隱藏の義と爲す、迷は迷圃の迷と同じ、過庭錄に載する所、扇上小兒の迷藏に題する詩に、誰か輕紈を剪りて巧に絲を織る、春深くして庭院兒嬉を作す、路郎意有り輕脫を嘲る、只迷藏の詩に入らざる有り、と、迷藏を以て捉迷藏と爲すは誤れり、

張籍が寒食内宴の詩の後四句に云ふ、千官盡く酔ふて猶坐せしむ、百戲皆呈して未だ收ることを放さず、共に喜ぶ恩を拜して夜を侵して出るを、金吾敢て行由を問は

不敢問行由、白居易春生詩、先遣和風報消息、續教啼鳥說來由、行由來由、入詩共新。

遠行者賣物來以遺人、今名曰土產、華人言之歸遺、東坡詩、搔首淒涼十年事、傳柑歸遺滿朝衣、又張宛丘詩、到舍將何作歸遺、江山收得一囊詩、是也、本于東方朔傳、歸遺、細君之語、又金朱自牧詩云、三年官業無毫髮、萬里裝囊更蕭瑟、歸來何以謝鄉閭、細說艱難爲土物、土物即與土產同、土產字收入詩語亦可。

無窮字有兩義、大抵如思無窮、與無窮、身世兩無窮、三千世界本無窮之類、皆無極盡之謂也、唐李益詩、洞庭一夜無窮鴈、不待天明盡北飛、劉禹錫詩、長安陌上無窮樹、唯有垂

すと、白居易春生の詩に、先づ和風をして消息を報せしめ、續いで啼鳥をして來由を説かしむと、行由來由詩に入る共に新なり。

遠行者、物を賣り來て以て人に遺る、今名けて土産かひひと曰ふ、華人之を歸遺と言ふ、東坡の詩に、首を搔いて淒涼十年の事、傳柑歸遺朝衣に滿つ、又張宛丘が詩に、舍に到つて何を將て歸遺と作さん、江山收め得たり一囊の詩と、是なり、東方朔が傳に、歸つて細君に遺るの語に本づく、又金の朱自牧が詩に云ふ、三年官業毫髮無し、萬里裝囊更に蕭瑟、歸り來て何を以てか郷閭に謝せん、細に艱難を説いて土物と爲す、土物は即ち土産と同じ、土産の字收めて詩語に入るも亦可なり。

無窮の字に兩義有り、大抵、思窮り無し、與窮り無し、身世兩ながら窮り無し、三千世界本窮り無し、の如きの類、皆極り盡くる無きを之れ謂ふなり、唐の李益が詩に、洞庭一夜無窮の鴈、天明を待たずして盡く北に飛ぶ、劉禹錫が詩に、長安陌上無窮の樹、唯、垂楊の別離を管する有

楊管別離、此無窮、猶言無數也。

明蜀成王宮詞、君王翌日宴長春、霖雨迷漫溱土塵、特令滿宮來壓止、一時懸挂掃晴人、卽謂掃晴娘也、帝京景物略云、雨久以白紙作婦人首、剪紅綠紙衣之、以苕帚苗縛小帚、令攜之、竿懸檐際、曰掃晴娘、卽今東土勾欄中女兒亦爲似此者。

居士之稱、本出于禮記及韓非子、謂道藝處士也、而婦人亦有稱居士者、明陳孟賢有侍姬、辨慧知書、號曰梅花居士、孟賢苦吟忽忽多所遺忘、姬輒能記之云。

本邦之俗、畫善馬美女及古戰之圖懸之祠廟堂上、名曰繪馬、華俗亦然、丹鉛錄云、吳太伯祠在闔門之東、每春秋、市人相率牲醴、多

り、此の無窮は猶ほ無數と言ふがごとし。

明の蜀成王が宮詞に、君王翌日長春に宴す、霖雨迷漫土塵を溼す、特に滿宮をして來りて壓止せしむ、一時懸挂す掃晴人と、卽ち掃晴娘を謂ふなり、帝京景物略に云ふ、雨久しければ白紙を以て婦人の首を作り、紅綠紙を剪り之に衣せ、苕帚苗を以て小帚を縛し、之を攜へしめ竿して檐際に懸く、掃晴娘と曰ふ、卽今東土勾欄中の女兒亦此に似たる者を爲る。

居士の稱、本は禮記及び韓非子に出でて、道藝の處士を謂ふなり、而して婦人も亦居士と稱する者有り、明の陳孟賢、侍姬有り、辨慧にして書を知る、號して梅花居士と曰ふ、孟賢苦吟忽々遺忘する所多し、姬輒ち能く之を記すと云ふ。

本邦の俗、善馬美女及び古戰の圖を畫き、之を祠廟堂上に懸け、名づけて繪馬と曰ふ、華俗亦然り、丹鉛錄に云ふ、吳の太伯祠は闔門の東に在り、春秋毎に、市人相率て牲醴し、多く善馬綠輿美女を圖し以て之を獻す、詩中之

圖善馬綵興美女以獻之、詩中或道之、陸放翁梅市道中廟垣新畫馬、村笛遠呼牛、是也、知新日錄古者祭祀用牲幣、秦俗牲用馬、淫祀浸繁、始用馬、唐玄宗瀆於鬼神、王璠以楮爲幣、今紙用馬以祀鬼神、蓋用畫馬、亦古之遺意也。

王安石詩、春衫尙未著、方空、案、方空見後漢書、注云、空、孔也、方空、謂方目紗也、元張憲詩、方空越白承恩厚、又紗之至輕者曰輕容、唐王建宮詞、嫌羅不著愛輕容、李賀詩、映雨澗輕容、唐類苑云、輕容、無花薄紗也。

余甚愛陶九成約語、曾懷瀟洒、千載之後、可想見也、特拈出之、以爲風流儒雅之公案、約語曰、百歲光陰、萬物乃天地逆旅、四時行樂、

を道ふ或り、陸放翁が梅市道中に、廟垣新に馬を畫き、村笛遠く牛を呼ぶ、是れなり、知新日錄に、古者祭祀、牲幣を用ゆ、秦俗、牲に馬を用ゆ、淫祀浸、繁く、始めて馬馬を用ゆ、唐玄宗は鬼神に瀆る、王璠楮を以て幣と爲す、今、紙にて馬を用ひ、以て鬼神を祀ると、蓋畫馬を用ゆるも、亦古の遺意なり。

王安石が詩に「春衫尙未だ方空を著けず」と、案するに、方空は後漢書に見ゆ、注に云ふ、空は孔なり、方空は方目紗を謂ふなり、元の張憲が詩に「方空越白恩を承くること厚し」、又紗の至て輕き者を輕容と曰ふ、唐の王建が宮詞に「羅を嫌ふて著けず輕容を愛す」、李賀が詩に「映雨、輕容を澗す」、唐類苑に云ふ、輕容は無花の薄紗なり。

余甚、陶九成が約語を愛す、曾懷瀟洒、千載の後、想見す可きなり、特に之を拈出し、以て風流儒雅の公案と爲す、約語に曰く、百歳の光陰、萬物は乃天地の逆旅、四時の行樂、我輩も亦風月主人、幸に居は酒水の濱に同じ、況や地は

我輩亦風月主人、幸居同、泗水之濱、況地接、
 九山之勝、儘可、傍花隨柳、庶幾遊、目勝、懷、節
 序、駸駸莫、負、芒鞋竹杖、杯盤草草、何漸、野蔬
 山肴、雖、立餉之情、懷、亦是百年之嘉話、敢煩、
 同志、互作、遨頭、慨、元祐之耆英、衣冠遠矣、集、
 永和之少長、觴詠依然、訂約、既勒、踐言弗替、
 按風月主人之句、原歐陽彬之語、彬爲、嘉州
 刺史、喜曰、青山綠水中爲、二千石、作詩、飲酒
 爲風月主人、豈不佳哉。

虞松方春謂、握月擔風、且留、後日、吞花臥酒、
 不可、過時、造語有風趣、殊可愛。

謂詩冊爲詩本、明縮續自題、詩本云、幼小工、
 刺綉、極知、箴綫難、紙緣、花樣古、不耐、入時看、
 白居易袖中吳郡新詩本句、共謂詩冊、而陸

九山の勝に接す、儘、花に傍ひ御に臨ふ可し、庶幾くば目
 を遊ばし懷を轉す、節序駸々、芒鞋竹杖に負くこと莫れ、
 杯盤草々、何ぞ野蔬山肴を懶ん、立餉の情懷と雖、亦是百
 年の嘉話、敢て同志を煩す、互に遨頭を作せ、元祐の耆英
 に慨ふ、衣冠遠し、永和の少長を集め、觴詠依然たり、訂約
 既に勒し、踐言替らずと、案ずんで、風月主人の句、原と歐
 陽彬の語、彬、嘉州刺史と爲る、喜んで曰く、青山綠水中に
 二千石と爲る、詩を作り酒を飲み風月主人と爲る、豈佳
 ならざらんやと。

虞松、春に方て謂ふ、月を握り風を擔ふは、且らく後日に
 留め、花に吞み酒に臥すは、時を過ごす可からず、と造語
 風趣有り、殊に愛す可し。

詩冊を謂て詩本と爲す、明の縮續自ら詩本に題するに云
 ふ、幼小刺綉に工なり、極めて知る箴綫の難きを、紙、花
 様の古きに緣りて、時に入て看るに耐へず、白居易の袖
 中吳郡の新詩本の句、共に詩冊を謂ふ、而して陸游、詩

遊閒用詩本字、吾行在處皆詩本、錦段難裁、
 試剪裁、天與詩人送詩本、一隻黃蝶弄秋花、
 又寄周浩道詩、半生篷艇弄烟波、最愛三湘
 欸乃歌、擬作此行、公勿怪胸中詩本漸無多、
 此詩本皆非、謂詩冊本種根之義、猶言酒本、
 菊本、眼前景物可取爲詩用、謂之詩本、有言
 畫本者、亦從用處、義不同、洪貫宮詞、聽得當
 家宣畫本、君王要、按美人圖、李流芳江月山
 花遠趁君、詩囊畫本留貽我、二作謂畫卷也、
 覺懷英秋容澄明納萬象、畫本寂默橫雙眸、
 又江村清曉皆畫本、此本字亦當從種根之
 義、又陸游乞與畫工團扇本、青林紅樹一川
 秋、尤爲新奇、又謂丹青本、湖村野興云、山色
 空濛雨點微、醉中不覺濕蓑衣、何妨乞與丹

本の字を用ゆ、吾が行在處皆詩本、錦段裁し難きも剪裁を試む、天、詩人に與へて詩本を送る、一隻の黃蝶秋花を弄す、又、周浩道に寄する詩に、半生篷艇烟波を弄す、最も愛す三湘欸乃の歌、此行を作んと擬す公怪む勿れ、胸中の詩本漸く多き無し、此の詩本は皆詩冊を謂ふに非ず、本は種根の義、猶ほ酒本菊本と言ふがごとし、眼前景物、取て詩用と爲す可き之を詩本と謂ふ、畫本と言ふ者あり、亦用處に従て、義同からず、洪貫が宮詞に、聽き得たり當家畫本を宣す、君王、美人の圖を按ぜんと要す、李流芳が、江月山花遠く君を趁ふ、詩囊畫本留て我に貽る、二作畫卷を謂ふなり、覺懷英が、秋容澄明萬象を納る、畫本寂默雙眸に横はる、又、江村の清曉皆畫本と、此本の字亦當に種根の義に従ふべし、又陸游が、畫工、團扇の本に乞與す、青林紅樹一川の秋と、尤、新奇と爲す、又丹青本と謂ふ、湖村野興に云ふ、山色空濛として雨點微なり、醉中覺えず蓑衣を濕す、何ぞ妨げん丹青の本を乞與するを、一棹横に翠鷺を衝いて歸る、陸游の此の詩、鄭谷が、江上晚來盡くに堪へたる處漁人、一蓑を披き得て歸るの句より、鍛鍊し出だし來る、故を以て新と爲すの法なり。

青本、一棹橫衝翠靄歸、陸游此詩、自鄞谷江上晚來堪畫處、漁人披得一蓑歸之句、鍛鍊出來、以故爲新之法也。

村字有爲賤陋之義、而押者、楊萬里山居睡後起弄花云、浸得荷花水一盆、將來洗面漱牙根、涼生鬚髻、香生頰沉麝、龍涎却是村、是也、與村風村情之村、義較相似、奇格可存。

楊萬里詩、翦翦輕風未、是輕、猶吹花片作、紅聲新致更佳矣、清人有杏花林裡犬聲紅之句、又加一等。

明張亨父名雪爲水精霞、陸鼎儀三月三日大雪、同亨父次前韻云、樓前寒蝶過東家、階下春江走白沙、靜裡燈疑有影、酒邊吹白半無花、深隨柳色添芳絮、巧與詩人鬪髻華、

村の字は賤陋の義と爲して押する者有り、楊萬里山居睡後起て花を弄するに云ふ、荷花を浸し得る水一盆、將ち來て面を洗ふて牙根に漱ぐ、涼、鬚髻に生じ、香、頰に生ず、沈麝龍涎却て是れ村と、是れなり、村風村情の村と、義較、相似たり、奇格存す可し。

楊萬里が詩に、翦々たる輕風未だ是れ輕からず、猶花片を吹いて紅聲と作す、新致更に佳なり、清人、杏花林裡犬聲紅なり」の句あり、又一等を加ふ。

明の張亨父雪を名けて水精霞と爲す、陸鼎儀が三月三日大雪、亨父と同く前韻に次ぐ、云ふ、樓前の寒蝶東家を過ぐ、階下の春江白沙を走らす、靜裡燈を移して影有るか、と疑ひ、酒邊、白を吹いて半は花無し、深く柳色に隨ふて芳絮を添へ、巧に詩人と鬪華を鬪はす、老眼平生素雨を

老眼平生貪素雨、不知更有水精霞、素雨水精霞、佳名、恰好、詩人未多用之。

程本立雪佛碑詩、全篇頗佳、標出于此、云天
花陰墜空、平地忽三尺、異哉西方神、現此水
精域、胎非託摩耶、意匠勞刻畫、乃瞻白玉相、
安用黃金飾、一洗熱惱心、悉依清淨力、紅日
起扶桑、終焉化無跡、其無本非空、其有亦非
色、君看東逝波、滄海不可測、我來鳳皇溪、古
寺久荆棘、摩娑雪佛碑、碑斷字莫識、金石亦
已壞、況非金石質、萬事等幻影、感之三歎息、
咏物最難矣、欲形模明備、則拘泥而近俗、欲
象似婉曲、則乖離而遠真、明唐時升有咏雁
字數首、能超脫拘泥乖離之二病、而風情殊
佳、爲頗得咏物工夫者、其詩云、蒼腹白露早

食、不知更に水精霞あるを」と、素雨水精霞、佳名、恰も好し、詩人未だ多く之を用ひず。

程本立の雪佛碑の詩、全篇頗る佳なり、標して此に出だす、云ふ、天花陰空より墜ち、平地忽ち三尺、異なるかな西方の神、現す此の水精域、胎は摩耶に託するに非ず、意は刻畫を勞し、乃ち瞻る白玉の相、安ぞ用ひん黄金の飾、一洗す熱惱の心、悉く清淨の力に依る、紅日、扶桑に起り、終焉化して跡無し、其の無本と空に非ず、其の有亦色に非ず、君看よ東逝の波、滄海測る可からず、我來る鳳皇溪、古寺久しく荆棘、摩娑す雪佛碑、碑斷えて字識る莫し、金石も亦已に壞る、況んや金石の質に非るをや、萬事幻影に等し、之を感じて三び歎息す。

咏物最難し、形模明備を欲すれば、則拘泥して俗に近し、象似婉曲を欲すれば、則乖離して真に遠かる、明の唐時升、雁字を咏する數首有り、能く拘泥乖離の二病を超脱して、風情殊に佳なり、頗る咏物工夫を得る者たり、其詩に云ふ、蒼腹白露早く粉々、上下參差意象分る、朔漢南來

紛紛、上下參差意象分、朔漠南來應、累譯、衝陽北望盡同文、方思坐臥觀三日、又見紆廻作五雲、一一總成龍鳳質、可教容易換鵝羣、又翩翩六翮破寒煙、初月纖纖列宿連、雨後模糊濃淡墨、風前斷續短長篇、綵霞淨拭紅絲硯、銀漢平鋪白地牋、自罷結繩書契起、憐君長在網羅邊、其他如、蘆洲掩映成飛白、竹塢廻翔欲殺青、影過平幃如畫壁、聲落前汀似印泥、空裡作書皆咄咄、日來多暇不匆匆、元常法備皆三折、阿買詩成寫八分、皆可謂警句。

朱之才詩、葵扇風未來、桃笙汗初浹、劉勳秋涼詩、桃笙乘勢獻、微涼、執扇無功送暑光、洪貫宮詞、倦劇歸來更漏永、一簾秋水浸桃笙、

應に譯を累ねべし、衝陽北望盡く同文、方に思ふ坐臥三日を觀る、又見る紆廻五雲を作すこと、一々總て龍鳳の質を成す、容易に鵝羣に換へしむ可けんや、又、翮々六翮寒煙を破る、初月纖々列宿連、雨後模糊たり濃淡墨、風前繼續す短長篇、綵霞淨く拭ふ紅絲硯、銀漢平に鋪く白地牋、結繩を罷めしより書契起る、憐む君が長く網羅の邊に在るを、其他蘆洲掩映飛白を成し、竹塢廻翔殺青せんと欲す、影は平幃を過ぎて畫壁の如し、聲は前汀に落ちて印泥に似たり、空裡書を作る皆咄々、日來多暇匆匆ならず、元常法備りて皆三折、阿買詩成りて八分を寫すの如き、皆警句と謂ふ可し。

朱之才が詩に、葵扇風未だ來らず、桃笙汗初て浹す、劉勳が秋涼詩に、桃笙勢に乗じて微涼を獻す、執扇功無くして暑光を送る、洪貫が宮詞に、倦劇歸り來りて更漏永し、一簾の秋水桃笙を浸す、猶覺寮雜記に云ふ、劉夢得が詩

猗覺寮雜記云、劉夢得詩、盛時一失難再得、桃笙葵扇安可常、東坡云、揚雄方言以簟爲笙、則知桃笙桃竹簟也、南史憲之傳疾疫死者、裹以笙席、蓋知笙即簟也。

退之詩、誰謂故人知我意、卷送八尺含風漪、曰竹簟名含風漪、後人多用之、范成大詩、一聲霜曉謾吹愁、八尺風漪不耐秋、陸游詩、初卷含風八尺漪、井桐已復不禁吹、八尺風漪、午枕涼風漪乍展、北窻涼、平展風漪可一牀、李清臣詩、八尺方牀織白藤、含風漪裏睡昏騰、皆濫觴於退之、而又有別曰含風漪、黃山谷以團茶洮州綠石研贈、無咎文潛詩云、張文潛贈君洮州綠石含風漪、能淬筆鋒利如錐、詩書元祐開皇極、第入思齊訪落詩、乃知

に、盛時一失再び得難し、桃笙葵扇安ぞ常にす可ん、東坡が云ふ、揚雄方言に簟を以て笙と爲す、則知る桃笙は桃竹簟なり、南史憲之傳に、疫を疾んで死する者は、裹むに笙席を以てす、と、蓋知る笙は即ち簟なり。

退之が詩に、誰か謂ふ故人我意を知る、卷き送る八尺の含風漪と、竹簟を曰て含風漪と名く、後人多く之を用ふ、范成大が詩に、一聲霜曉謾に愁を吹く、八尺の風漪秋に耐へず、陸游が詩に、初て卷く含風八尺の漪、井桐已に復た吹くに禁へず、八尺の風漪午枕涼し、風漪乍ち展ぶ北窻の涼、風漪を平展して一牀に可なり、李清臣が詩に、八尺方牀白藤を織る、含風漪裏睡昏騰る、皆退之に濫觴す又別に含風漪と曰ふ有り、黃山谷團茶洮州綠石研を以て無咎文潛に贈る詩に云ふ、張文潛君に贈ス洮州の綠石の含風漪、能く筆鋒を淬て利きこと錐の如し、請ふ元祐を書して皇極を開き、第、思齊訪落の詩に人れよ、と、乃知る石研も亦名けて含風漪と爲すなり。

石研亦名爲含風漪也。

楊萬里詩千尺霜松夾道周、國初涼繖至今留、自注、路人號夾道松爲涼傘樹、本邦官道亦有涼傘樹、而詩人未道及于此、可見古人詩眼不遺一物。

風花謂花隨風而飛也、杜子美寒食江村路、風花高下飛、東坡交游雖似雪、柏堅聚散行、風花瞥而陸游詩、風花忽起又遮山、自注、風欲作、則大霧充塞、謂之風花。

武帝與麗娟看花時、薔薇始開、態若含笑、帝曰、此花絕勝、佳人笑也、麗娟戲曰、笑可買乎、帝曰、可、麗娟遂奉黃金百片、爲買笑錢、薔薇名賣笑花、自麗娟始。

琉球國史略載萩花、詳言其品狀、枝條纖弱

楊萬里が詩に、「千尺の霜松道周を夾む、國初の涼繖今に至て留む、自注に、路人、夾道松を號して涼傘樹と爲すと、本邦官道亦涼傘樹有り、而して詩人未だ此に道ひ及ばず、見る可し、古人の詩眼一物を遺さざるを。」

風花は花の風に隨つて飛ぶを謂ふなり、杜子美が「寒食江村の路、風花高下に飛ぶ、東坡が「交游、雪柏の堅に似たり」と雖も、聚散行、風花の瞥を作す、陸游が詩に、風花忽起て又山を遮る、自注に、風作らんと欲すれば則大霧充塞す、之を風花と謂ふ。

武帝麗娟と娟を看る時、薔薇始めて開く、態、笑を含むが若し、帝曰く、此花絶だ佳人の笑ふに勝り、麗娟戲れて曰く、笑ひ買ふ可きか、帝曰く、可なり、麗娟遂に黄金百片を奉じて買笑錢と爲す、薔薇を賣笑花と名づくるは麗娟より始まる。

琉球國史略に萩花を載す、詳に其品狀を言ふ、枝條纖弱

如柳、小葉如榆、亦作品字、九月開花、葉間遍滿、紫豔如匾豆花形、和歌者流多用萩字、而詩賦中未曾見用者、改名爲天竺花、蓋以萩字不本義之故、余謂一經華人之口、則用入佳語、亦何妨、

秋海棠一名斷腸花、昔婦人思所歡不見、輒涕泣、恆灑淚於北牆之下、後灑處生草、其花甚媚、色如婦面、其葉正綠反紅、秋開、名曰斷腸花、卽今秋海棠也、出鄉媛記、秋海棠亦單曰海棠、范成大秋晚詩有小春應爲海棠來之句、胡嶠詩餅裡數枝婪尾春、桑維翰曰、唐末文人有所謂芍藥爲婪尾春者、婪尾酒乃最後之盃、芍藥殿春、亦是爲名、

胡嶠飛龍欄飲茶詩云、沾牙舊姓餘甘氏、破

にして柳の如く、小葉榆の如し、亦品字を作す、九月花を開く、葉間遍滿して、紫豔、匾豆花の形の如し、和歌者流多く萩の字を用ふ、而して詩賦中、未だ曾用ふる者を見ず、改名けて天竺花と爲す、蓋萩の字は本義ならざるを以ての故なり、余謂ふ一び華人の口を經ば則用て佳語に入る、亦何ぞ妨ん、

秋海棠、一に斷腸花と名づく、昔婦人、歡する所を思て見えず、輒涕泣す、恆に淚を北牆の下に灑ぐ、後灑處に草を生ず、其花甚媚ぶ、色、婦面の如し、其葉正綠反紅、秋開く、名けて斷腸花と曰ふ、卽今の秋海棠なりと、鄉媛記に出づ、秋海棠亦單に海棠と曰ふ、范成大が秋晚の詩に、小春應に海棠の爲に來るべしの句有り、

胡嶠が詩に、餅裡の數枝婪尾の春、桑維翰曰く、唐の末文人芍藥を謂つて婪尾春と爲す者有り、婪尾酒は乃ち最後の盃、芍藥は春に殿す、亦是れを名と爲す、

胡嶠飛龍欄に茶を飲む詩に云ふ、牙を沾す舊姓は餘甘

睡當封不夜侯、二句新奇甚矣。

中酒字、詩中多用、而王阮亭詳說中字音、中酒始見徐邈傳、中聖人、義如中著之中、而音反從平聲、樊噲傳、項羽既罷軍士、中酒、注云、飲酒之中也、不醉不醒、故謂之中、義宜從平聲、而音乃竹仲切、何也、然古人詩如氣味如中酒之類、皆從平聲、無竹仲一讀、又宋王觀國學林云、老杜漢家新數中興年、百年垂死、中興時、中竝去聲、蒸民詩序曰、任賢使能、周室中興焉、陸德明音義曰、中、丁仲反、觀國按、中字有鐘衆二音、音鐘者、當二者之中、首尾均也、音衆者、首尾不必均、但在二者之間、爾此中興之中、所以音衆、楊仲宏詩、一代人才、頗中衰、竝去聲、概無平聲、姚福云、中酒作去

氏、睡を破て當に不夜侯に封ぜらるべし、二句新奇甚し。

中酒の字、詩中多く用ふ、王阮亭詳に中の字の音を説く、中酒は始て徐邈傳に見ゆ、聖人に中らる、義、中著の中の如し、而して音反て平聲に從ふ、樊噲傳に、項羽既に軍士を罷して、酒に中す、注に云ふ、飲酒の中なり、醉はや醒めず、故に之を中と謂ふ、義宜く平聲に從ふべし、而して音、乃、竹仲の切は何ぞや、然に古人の詩に、氣味中酒の如し、の類の如き、皆平聲に從ふ、竹仲の一讀無し、又宋の王觀國が學林に云ふ、老杜が「漢家新に數ふ中興の年、」百年死に垂んとす中興の時、中、竝に去聲、蒸民の詩の序に曰ふ、賢に任じ能を使ふ、周室中興す、陸德明音義に曰く、中は丁仲の反、觀國按するに、中の字に鐘衆の二音有り、音鐘は二者の中に當る、首尾均なり、音衆は首尾必ずしも均からず、但二者の間在るのみ、此れ中興の中、音衆なる所以、楊仲宏の詩、一代人才頗る中衰す、竝に去聲、槩して平聲無し、姚福云ふ、中酒は去聲と作す、義に於て長と爲す、蓋中傷の義有り、余按するに中酒、當に姚説に従て是と爲すべし、詩中に用ゆる者、竝に未だ頗注に従て義を爲すを見ず、韋莊が「近來酒に中れて起ると常に遍し、臥して南山を看て舊詩を吟す、楊萬里が「花は中酒の如

聲、於義爲長、蓋有中傷之義、余按、中酒當從姚說爲是、詩中用者、竝未見、從顏注爲義、韋莊近來中酒起常遲、臥看南山吟、舊詩、楊萬里花如中酒不惺鬆、又宋人句、中酒病風流、郭銓中酒心情厭、日長、倪瓚春興、繁花俱欲謝、愁如中酒不能醒、旅思悽悽如中酒、人情落、落似殘棋、明王弼詩、昨夜追歡一闋堂、醉歸山月已無光、朝來中酒無人問、臥聽春鶯不下牀、此數句皆中傷之義、而多從去聲、唐人氣味如中酒亦當爲中傷之義、若爲中半之中、則句意不解、而從平聲者可疑、宋白暖日只添中酒睡、亦誤爲平聲、共不可據證也、又中聖人之中、中當之義、反多從平聲、李白醉月頻中聖、迷花不事君、東坡公特未知其趣、

く惺鬆ならず、又宋人の句に、酒に中られて病風流郭銓が「酒に中られ心惰日の長きを厭ふ、倪瓚が、春は繁花と俱に謝せんと欲す、愁は中酒の如く醒ること能はず、旅思悽々として中酒の如し、人情落々として殘棋に似たり、明の王弼か詩に、昨夜歡を追ふて一闋堂す、醉歸山月已に光無し、朝來酒に中られて人の問ふ無し、臥して春鶯を聽いて牀を下らず、此數句皆中傷の義なり、而して多く去聲に従ふ、唐人の、氣味中酒の如し、亦當に中傷の義と爲すべし、若し中半の中と爲さば則句意解せず、而して平聲に従ふ者は疑ふ可し、宋白が、暖日右、添ふ中酒の睡、亦誤て平聲と爲す、共に據證す可らず、又聖人に中らるの中は、中當の義、反て多く平聲に従ふ、李白が、月に酔ふて頻りに聖に中り、花に迷ふて君に事へず、東坡が「公特に未だ其趣を知らざるのみ、臣今時に復た一び之に中らる、范成大が「浮世の功名酒一中、宋无が「春半園林酒正に中す、皆證す可し、又林鴻が「臘に泛ぶ酒香して頻に聖に中らる、流年花發く總て愁に關る、去聲に従ふ者は、但、此れのみ、

耳、臣今時復一中之、范成大浮世功名酒一中、宋无春半園林酒正中、皆可證、又林鴻泛、臘酒香頻中、聖、流年花發總關愁、從去聲者、但此而已。

馬行誤路、謂之誤馬、陸游詩、新粧褰幕全身見、誤馬隨車一笑回、又明沈德符題朱倩新居詩云、樓徙全家勞燕子、門停誤馬吠獬兒、正是新居之實事、誤馬字用得甚好。

端午曰端陽、又曰重午、王綬詩、葵榴花開蒲艾香、都城佳節逢端陽、蔡羽五月詩、佳期正與端陽近、莫怪榴花別樣紅、莊泉端午賜粽詩、千官曉綴紫宸班、拜向彤墀賀重午、五雜俎云、古人午五二字通用、端始也、端午猶言初五也、然則重午即重五也、又楊萬里端午

馬行いて路を誤る、之を誤馬と謂ふ、陸游が詩に、新粧褰幕を巻けて全身見はる、誤馬車に隨ふて一笑して回る、又明の沈德符の朱倩が新居に題する詩に云ふ、樓は全家を徙して燕子勞し、門は誤馬を停て獬兒吠ふ、正に是れ新居の實事、誤馬の字用得甚だ好し。

端午を端陽と曰ふ又重午と曰ふ、王綬が詩に、葵榴花開いて蒲艾香し、都城の佳節端陽に逢ふ、蔡羽が五月の詩に、佳期正に端陽と近し、怪むること、莫れ榴花別様に紅なり、莊泉が端午粽を賜ふ詩に、千官曉に綴る紫宸の班、拜して彤墀に向つて重午を賀す、五雜俎に云ふ、古人午五二字通用す、端は始めなり、端午は猶初五と言ふがごときなり、然らば則ち重午は即ち重五なり、又楊萬里端午筆を試る詩に、病較逢ふことを欣ぶ五々の辰、宮衣

試筆詩病較欣逢五五辰宮衣忽憶拜天恩
五五辰即曰重五重九亦可曰九九辰

俗語以物送人名曰送人專又曰作人情人事字見晉書武帝班五條詔書於郡國其條中有去人事一條方知此語晉時已有又韓文公集中有謝許受王用男人事物狀奏韓弘人事物表二篇按王用憲宗之舅男名沼請昌黎爲王用作神道碑送有馬一匹並鞍銜白玉腰帶一條昌黎未敢受具狀奏聞憲宗令昌黎領受故狀內有令臣受領人事物等之語又表語云韓弘寄絹五百匹與臣充人事可知人事是總名古又謂之意氣虞噓父爲晉孝武侍中帝曰卿在門下初不聞有獻替虞家富春近海謂帝望其意氣對曰天

忽ち憶ふ天恩を拜するをと、五五の辰は即ち重五々曰ふ、重九も亦九九の辰と曰ふ可し。

俗語に物を以て人に送る、名けて人事を送ると曰ふ、又人情を作すと曰ふ、人事の字晉書に見ゆ、武帝五條を班ち、郡國に詔書す、其餘中に、人事を去る一條有り、方に知る此語晉時已に有るを、又韓文公集中、王用が男の人事物を受るを許すを謝する狀韓弘が人事物を奏する表二篇有り、按ずるに、王用は憲宗の舅、男の名は沼昌黎に請て王用が爲に神道の碑を作り、送るに馬一匹並に鞍銜白玉腰帶一條有り、昌黎未だ敢て受けず、具狀奏聞す、憲宗昌黎をして領受しむ、故に狀内、臣をして人事物を受領せしむ等の語あり、又表語に云ふ、韓弘、絹五百匹を寄せ臣に與へ、人事に充つと、知る可し人事は是總名、古又之を意氣と謂ふ、虞噓父、晉の孝武が侍中と爲る、帝曰く、卿門下に在り、初、獻替あるを聞かずと、虞、富春に家し海に近し、謂へらく帝、其意氣を望むと、對て曰く、天時尚暖なり、鰾魚鱈、未だ致す可からず、尋で當に上獻する所有るべしと、帝大に笑ふ、意氣は即ち謂ゆる人情是なり、王符の愛日篇に朝輔に非れば通ずることを得ず、意氣に非れ

時尙暖、鰯魚蝦鱈、未可致、尋當有所上獻、帝大笑、意氣卽所謂人情是也、王符愛日篇、非朝餽不得通、非意氣不得見、仲長統法誠篇、請託不行、意氣不滿、立能陷人於不測之禍、是皆謂苞苴之類也、宣帝詔吏、或飾厨、傳稱使客、以取名譽、韋昭注、修飾意氣、以稱過容而已。

詩用家山字、又有言家林、任原詩、客路驚心孤鷹影、家林入夢、斷猿聲、丁起潛詩、首塗才此夕、忽謾話家林。

陸游詩、愛百衲琴、常鎖匣、買雙鈎帖、不論錢、集衆好木片、漆膠以造之、謂之百衲琴、廣川書跋云、蔡君謨妙得古人書法、其書畫錦堂、每字作一紙、擇其不失法度者、裁截布列、連

ば見ることを得ず、仲長統法誠篇に請託行はれず、意氣満たずんば立ちどころに人を不測の禍に陥いると、是れ皆苞苴の類を謂ふなり、宣帝吏に詔し或は厨を飾り、使客に傳稱して以て名譽を取る、韋昭注に、意氣を修飾して、以て過容に稱ふのみと。

詩に家山の字を用ふ、又家林と言ふ有り、任原が詩に、客路心を驚かす孤鷹の影、家林夢に入る斷猿の聲、丁起潛が詩に、首塗才に此夕、忽謾に家林を話す。

陸游の詩に「百衲琴を愛して常に匣を鎖す、雙鈎帖を買ふて錢を論ぜず、衆好木片を集め、漆膠以て之を造る、之を百衲琴と謂ふ、廣川書跋に云ふ、蔡君謨、古人の書法を得るに妙なり、其畫錦堂を書するや、字毎に一紙を作り、其法度を失はざる者を選び、裁截布列し、連ねて碑形を

成碑形、當時謂之百納本、又墨池編爲百納碑。

膺膊雞擊羽聲也、古詩云、膺膺膊膊雞初鳴、落落磊磊向曙星、韓文公關雉聯句、膺膊戰聲喧、陸游用之、言碁石之聲、閉戶碁聲聞、膺膊、又嬾陪陌上雍容騎、且對閑窗膺膊碁、范成大節物詩、撚粉團、藥意、熬稗膺膊聲、轉用尤奇。

詩或用破字、義猶過也、杜子美二月已破三月來、沉佺期別離頻破月、李商隱新正未破剪刀閑、陸游免歸又破六年閒、北齋孤坐破三更、萬里安西無夢到、却尋僧話破年光、韓奕春事夢中三月破、皆是也、杜詩讀書破萬卷、亦猶言讀書過萬卷耳、張遠說爲識破萬

成す、當時之を百納本謂ふ、又墨池編に百納碑と爲す。

二〇

膺膊は雞の羽を撃つ聲なり、古詩に云ふ、膺々膊々雞初めて鳴く、落落磊々曙に向ふ星、韓文公が關雉聯句に、膺膊戰聲喧なり、陸游、之を用ひて碁石の聲を言ふ、戸を閉ぢて碁聲膺膊を聞く、又、陪するに嬾し陌上雍容の騎、且つ對す閑窗膺膊の碁、范成大が節物の詩に、粉を撚す團、藥の意、稗を熬す膺膊の聲、轉用尤奇なり。

詩に或は破の字を用ゆ、義、猶ほ過のごときなり、杜子美が二月已に破きて三月來る、沈佺期が別離頻りに月を破ぎ、李商隱が新正未だ破ぎず剪刀閑なり、陸游が、歸を免て又破ぐ六年の間、北齋孤坐三更を破ぐ、萬里安西夢の到る無く、却て僧話を尋て年光を破ぐ、韓奕が春事夢中三月破ぐ、皆是れなり、杜詩に、書を讀で萬卷に破ぐ、亦猶ほ讀書萬卷に過ぐと言ふが、この時のみ、張遠は説いて萬卷の理を識破すと爲す、仇滄注に謂ふ、猶章編三絶のこ

卷之理、仇滄注謂猶韋編三絶、蓋熟讀則卷易磨也、兩說共涉于鑿。

余始以取次爲次第之義、而見古人所用、有苟且隨便二義耳、杜子美取次莫論、兵東坡人生此樂須天賦、莫遣見曹取次知、陸游小草清詩取次成、袖手哦詩取次成、皆苟且之義也、皎然取次閑眠有禪味、善來意舞伴歌取次行、祝允明亭角樓窗取次憑、是隨便之義、唯范滂贈王日常詩、一月留君與未闌、酒杯無限費春寒、海棠欲卸辛夷盡、取次看花到牡丹、乃知以取次爲次第、亦一義。

范石湖詩、趁虛漁子晨爭渡、賽廟商人晚醉歸、李好復詩、落日趁虛人已散、白鷺飛上渡頭船、碧溪詩話云、凡聚落相近、期某且集交

し、蓋熟讀せば則、卷磨し易きなり、兩說共に鑿に涉る。

余始め取次を以て次第の義と爲す、而して古人の用ふる所を見るに、苟且隨便の二義有るのみ、杜子美が「取次に兵を論ずる莫れ」、東坡が「人生此樂須らく天賦なるべし」、兒曹をして取次に知らしむる莫れ、陸游が「小草清詩取次に成る」、手を袖にし詩を哦して取次に成る、皆苟且の義なり、皎然が「取次に閑眠禪味あり」、善來が「意舞伴歌取次に行く」、祝允明が「亭角樓窗取次に憑る」、是れ隨便の義、唯、范滂が王日常に贈る詩に、「一月君を留めて興未だ闌ならず、酒杯限り無く春寒を費す、海棠卸さんと欲して辛夷盡く、取次に花を見て牡丹に到る」、乃知る、取次を以て次第と爲すも亦一義なり。

范石湖が詩に、虚を趁ふ漁子晨に渡を争ふ、廟を賽する商人晚に醉歸す、李好復が詩に、落日虚を趁ふ人已に散じ、白鷺飛び上る港頭の船、碧溪詩話に云ふ、凡そ聚落相近し、某且を期して、集りて交易して閑然たり、其名を虚

易闕然其名爲虛、柳子厚詩、綠荷包飯趁虛人、臨川詩、花間人語趁朝虛、山谷詩、符葉鹽羹同趁虛、又人集春蔬好趁虛、按嶺南志、荆吳俗、取寅申巳亥日、集于市、曰亥市、又南部新書、端州以南三日一市、謂之趁虛、猶今之曰三日市、四日市、是也。

司馬溫公曰、衣冠所以爲容觀也、稱體斯美矣、世人捨其所稱、聞人所尙而慕之、豈非以耳視者乎、飲食所以爲味也、適口斯善矣、世人取果餌而刻鏤之、朱綠之、以爲盤案之玩、豈非以自食者乎、耳視目食、字奇、又有眼語目笑、五代史云、昭宗舉酒屬朱溫、與韓建、次何皇后舉觴建、躡朱溫足、乃賜辭去、建出謂朱溫曰、天子與宮人眼語、幕下有兵仗聲、恐

と爲す、柳子厚が詩に、綠荷飯を食む虚を趁ふ人、臨川の詩に、花間の人語朝虚を趁ふ、山谷が詩に、符葉鹽を裏んで同じく虚を趁ふ、又「人集」で春蔬好し虚を趁ふ、按ずるに、嶺南志に荆吳の俗、寅申巳亥の日を取て市に集る、亥市と曰ふ、又南部新書に、端州以南三日一市、之を趁虚と謂ふ、猶ほ今の三日市、四日市と曰ふがごとし、と是れなり。

司馬溫公曰く、衣冠は容の觀を爲す所以なり、禮に稱へば斯に美なり、世人、其稱ふ所を捨て、人の尙ぶ所を聞て之を慕ふ、豈、耳を以て視る者に非ずや、飲食は味を爲す所以なり、口に適すれば斯に善し、世人、果餌を取り、而して之を刻鏤し、之を朱綠にし、以て盤案の玩と爲す、豈、目を以て食ふ者に非ずやと、耳視目食の字奇なり、又眼語目笑有り、五代史に云ふ、昭宗酒を舉げて朱溫と韓建とに屬す、次に何皇后觴を舉ぐ、建、朱溫が足を躡み、乃賜り辭ふて去る、建出て朱溫に謂て曰く、天子、宮人と眼語す、幕下に兵仗の聲有り、恐くば公免れずと、目笑は平原君傳に出づ、又劉孝威、婦に寄する詩あり、窈窕にして眉

公不免也、目笑出、平原君傳、又劉孝威有寄婦詩、窗踈眉語度、紗輕眼笑來、更覺斬新。張耒儀寄衣曲云、家機織得流黃素、首尾量來寬尺度、象牀玉手熨帖平、緩剪輕裁燭花暮、含情暗付今瘦肥、著處難知宜不宜、再拜征人寄將去、邊城寒早莫教遲、歸掩雙扉空淚落、舊繡遮身曉、寒薄、良人早得封侯歸、妾身何愁少、衣著、陳簡齋叢說、載、裴說寄邊衣詩、曰、深閨乍冷開香篋、玉筋微微濕紅頰、一陳霜風殺柳條、濃烟半夜成黃葉、重重白練明如雪、獨下閑階轉淒切、祇知抱杵擣秋砧、不覺高樓已無月、時聞塞鴻聲相喚、紗窗只有燈相伴、幾展齊紈又懶裁、離腸恐逐金刀斷、細想儀形執牙尺、回刀剪破澄江色、愁捻

語度る、紗輕して眼笑來る、更に斬新を覺ふ。

張耒儀の衣を寄する曲に云ふ、「家機織り得たり流黃素、首尾量り來らば尺度寬し、象牀玉手熨帖平なり、緩く剪り軽く裁す燭花の暮、情を含で暗に付る今の瘦肥、著くる處知り難し宜と不宜と、征人を再拜して寄せ將ち去る邊城寒早し遅からしむること莫れ、歸りて雙扉を掩ふて空く淚落つ、舊繡身を遮りて曉寒薄し、良人早く封侯を得て歸らば、妾が身何ぞ愁ん衣著少きを」と、陳簡齋叢說に、裴說が邊衣を寄する詩を載す、曰く、「深閨乍ち冷にして香篋を開く、玉筋微々紅頰を濕す、一陳の霜風柳條を殺す、濃烟半夜黃葉を成す、重々たる白練明、雪の如し、獨、閑階を下て轉、淒切、祇、知る杵を抱て秋砧を擣く、ハハへち高、ハハに月無きを、時に聞く塞鴻の聲相喚ぶを、紗窗只、燈の相伴ふ有り、幾びか齊紈を展て又裁するに懶し、離腸恐くは金刀を逐て斷ん、細に儀形を想ふて牙尺を執る、刀を回して剪破す澄江の色、愁て銀針を捨て手に信せて縫ふ、惆悵す人の寬窄を試むる無し、時々手を舉て殘淚を勾す、紅繡漫に千行の字有り、書中盡さず心中の事、一半

銀針信手縫、惆悵無人試、寬窄時時舉、手勾殘淚、紅牋漫有千行字、書中不盡心中事、一半懸懸託邊使、此二詩風情一軌、袖釋如、甄綺麗如、織流調渾然、託筆如話、可謂佳作、雖唐人未及于此、而裴詩則語優而情有餘、張則尙隔一關。

明張愈光句云、銷骨驚花箭、離腸泥酒船、花箭字原出于寒山詩、云玉堂掛朱簾、中有嬋娟子、其貌勝神仙、容華若桃李、東家春霧合、西舍秋風起、更過三千年、還成甘蔗滓、人言是牡丹、佛說是花箭、射入人骨髓、死而不知愁、是極說女色害於人、花箭字甚奇。

詩雖一字不可苟下、一字不工、全作爽快、弘仁帝謂小野篁曰、遊河陽館得一聯、曰閉閣

窗懸碧、邊使に託すと。此の二詩風情一軌、袖釋の如し、綺麗の如し、流調渾然、託筆話するが如し、佳作と謂ふ可し、唐人と雖も未だ此に及ばず、而して裴が詩は則語優にして而して情餘り有り、張は則尙一關を隔つ。

明の張愈光が句に云ふ、鎖骨、花箭に驚き、離腸酒船に泥む」と、花箭の字、原と寒山の詩に出づ、云ふ、玉堂、朱簾を掛く、中に嬋娟子有り、其貌、神仙に勝れり、容華桃李の若し、東家春霧合し、西舍秋風起る、更に過ぐ三千年、還て成す甘蔗の滓、人は言ふ是れ牡丹と、佛は説く是れ花箭と、射て人の骨髓に入る、死して愁を知らずと、是れ極めて女色の人に害あるを説く、花箭の字甚だ奇なり。

詩は一字と雖も、苟も下す可らず、一字工ならざれば、全作佳を喪ふ、弘仁帝、小野の篁に謂て曰、河陽館に遊び、一聯を得たり、曰く、閣を閉ちて唯、聞く朝暮の鼓、樓に登

唯聞朝暮鼓登樓遙望往來船。篁曰：御製大佳。唯改遙作空字則可。上曰：是白居易詩。作空。今特換一字以試。汝因謂龔堂詩話所載任翻題台州寺壁曰：前峯月照一江水。僧在翠微開竹房。既去有觀者。取筆改一字作半字。翻行數十里。乃得半字。亟回欲易之。則見所改云。乃知一字之工。才力自有長短也。橘直幹遊石山寺。有蒼波路遠雲千里。白霧山深鳥一聲之句。僧奮然入。宋雲爲霞。鳥爲蟲。以爲己所作。宋人見之曰：霞改雲。蟲改鳥。則佳也。甚矣奮然詩才卑拙。豈敢得儉於具眼耶。內省而可自恥矣。茲俗造僞金者。鑿真金。換以銅鉛填之。以欲騙人。詩人如奮然者。與造僞金者。其罪何異。

りて遙に望む往來の船」と篁曰く、御製大に佳なり。唯、遙を改めて空の字に作らば則可ならんと、上曰く、是れ白居易の詩にして、空に作れり、今、特に一字を換へ、以て汝を試みたりと、因て謂ふに、龔堂詩話に載する所の任翻が台州寺の壁に題するに曰く、前峯月は照す一江水、僧は翠微に在りて竹房を開く」と、既に去る、觀者あり筆を取りて一の字を改めて、半の字に作る、翻行くこと數十里にして、乃半の字を得たり、之に回り、之を易へんと欲せば、則ち改むる所を見ると云ふ、乃ち一字の工は、才力自ら長短有るを知るなり、橘の直幹、石山寺に遊ぶに、蒼波路遠し雲千里、白霧山深し鳥一聲の句有り、僧奮然、宋に入り、雲を霞と爲し、鳥を蟲と爲し、以て己が作る所と爲す、宋人之を見て曰く、霞を雲に改め、蟲を鳥に改めば則佳なりと、甚しいかた奮然が詩才、卑拙なる、豈に敢て具眼を偷むことを得んや、内に省みて自ら恥づ可し、茲俗の僞金を造る者、真金を鑿り、換ふるに銅鉛を以てして之に填し、以て人を騙むかんと欲す、詩人奮然の如き者は、僞金を造る者と、其罪何ぞ異ならん。

本邦古昔詩人、閒有佳句、江朝綱暮春詩、落花狼藉風狂後、啼鳥龍鐘雨打時、藤公任詩、荒村日落烟猶細、遠岫雲幽鳥獨歸、與宋人句可竝誦。

余不愛於用才、而愛於用思、長於用才者、落筆成章、雖常摠先取勝、其詩多粗醜率易、唯可以瞞兒曹、而具眼一見、疵瑕百出、長於用思者、沈著融渾、而鍊磨成句、咸是無瑕美玉也、趙叔鳴論詩曰、此道不宜淺、淺則庸茸下矣。

畫爲西施、美而不可悅、刻作桃李、似而不可食也、摹倣唐詩者、畫西施、刻桃李也。

東坡曰、昔之爲文者、非能爲之爲工、乃不能不爲之爲工也、古人詩文能至于妙處者、要

本邦古昔の詩人、閒、佳句あり、江の朝綱が暮春の詩に、「落花狼藉たり風狂の後、啼鳥龍鐘たり雨の打つ時」と、藤の公任が詩に、「荒村日落ちて烟猶細く、遠岫雲幽にして鳥獨歸る」と、宋人の句と竝べ誦す可し。

余才を用ふるを愛せずして、思を用ふるを愛す、才を用ふるに長ずる者は、落筆成章を成す、常に摠先して勝を取ると雖も、其詩多くは粗醜率易、唯以て兒曹を瞞す可く、而して、具眼一見、疵瑕百出す、思を用ゆるに長ずる者は、沈著融渾、而して鍊磨句を成す、咸く是れ無瑕の美玉なり、趙叔鳴、詩を論じて曰、此道宜く淺くすべからず、淺ければ則ち庸茸にして下なりと。

畫いて西施を爲せば、美なるも而も悦ぶべからず、刻して桃李を作る、似たるも而も食ふべからず、唐詩を摹倣する者は、畫西施刻桃李なり。

東坡曰く、昔の文を爲る者は、能く爲すを之れ工と爲すに非ず、乃ち爲さざる能はざるを之れ工と爲すなり、古人の詩文、能く妙處に至る者は、要するに其自然を以て

以其自然也。

詩道之本事、直吐出性情而已、性情極不凡、而其語自精妙、如尋常拘繫一生隨前人脚跟者、非所能及也、源西山公有宴花下一篇、其詩云、有花有酒兩相宜、酒已闌時花亦奇、此日看花添酒興、今春啣酒問花期、花如珠也、酒如蜜、酒入杯、花入詩、一世愛花還愛酒、花之與酒我生涯、如此篇、意象之超越、語氣之慷慨、婉曲流調、何等手段、雖作家、未多如此者、威鳳之一羽、足以驗全德、公長於干戈之間、文武雙有、當時諸侯無與之比肩、而其言如此、今世鄉曲學究、或不能自下一字、而觀他人作詩賦、必非之曰、嘲風弄月、於道義何益、況又好爲花酒耽樂之語、吾有慙德、

なり。

詩道の本事は、直ちに性情を吐出するのみ、性情極めて凡ならずして、而して其語自ら精妙、尋常拘繫して、一生、前人の脚跟に隨ふ者の如きは、能く及ぶ所に非るなり、源西山公、花下に宴する一篇あり、其詩に云、花あり酒あり、兩ながら相宜し、酒已に闌なる時花も亦奇なり、此の日花を見て酒興を添ふ、今春酒を啣んで花期を問ふ、花は珠の如きなり、酒は蜜の如し、酒は杯に入り花は詩に入る、一世花を愛して還た酒を愛す、花と酒とは我が生涯と此篇の如き、意象の超越、語氣の慷慨、婉曲流調、何等の手段ぞ、作家と雖も、未だ此の如きもの多からず、威鳳の一羽、以て全德を驗するに足れり、公は干戈の間に長じ、文武雙有、當時の諸侯、之れと比肩するなし、而して其言此の如し、今世鄉曲の學究、或は自ら一字を下すこと能はず、而して他人の詩賦を作るを觀て、必之れを非として曰く、風を嘲り月を弄ぶ、道義に於て何の益あらん、況や又好で花酒耽樂の語を爲す、吾れ慙德有り、故に爲さざるなりと、此れ固に腐頭巾の呆語にして、詩道を解せざる者なり、實に大嘘す可し、蓋渠れ爲さざるには非ず、能はざるなり、故に自ら其言を矯飾して、以て姑く已

故不爲也、此固腐頭巾呆語、不解詩道者、實可大噓、蓋渠非不爲不能也、故自矯飾其言、以姑蔽己拙而已、且夫苟如渠不逆、意所在、唯以辭而已、則如西山公此篇、其謂之何、豈爲假紅倚翠之人、而可耶、癡人前不可說夢、古今之確言。

詩人之言、未必無其感觸之所由來也、徒有羨魚情、戒貪欲之伎倆也、隔水問樵夫、謂與世人路異也、仙客好樓居、謂卓出于塵表也、長信宮中草、小人滋蔓茅塞賢路之謂、涉江采芙蓉、擬通無道而爲重華之民之謂也、如此之類、不可枚舉、見者推一隅、而其餘可知矣。

梧桐詩話卷一終

が拙を蔽ふのみ、且つ夫れ苟渠れの如き、意の在る所を逆へずして、唯、辭のみを以てせば、則西山公の此篇の如き、其れ之を何と謂はん、豈に假紅倚翠の人と爲して可ならんや、癡人の前には夢を説くべからずとは、古今の確言なり。

詩人の言、未だ必しも其感觸の由て來る所無くんばあらず、徒に魚を羨むの情ありとは、貪欲の伎倆を戒むるなり、水を隔て、樵夫に問ふとは、世人と路異なるを謂ふなり、仙客、樓居を好むとは、塵表に卓出するを謂ふなり、長信宮中の草とは、小人滋蔓して賢路を茅塞するを之れ謂ふ、江を涉りて芙蓉を采るとは、無道を通れて重華の民と爲らん事を擬するを之れ謂ふなり、此の如きの類、枚舉すべからず、見る者一隅を推して、而して其餘は知る可し。